

## 中唐の劉商について — 詩人・樹石画家・道士としての生涯 —

竹浪 遠

はじめに

劉商（七三八前後〜八二三以前）は、中唐（八世紀後半〜九世紀前半）の前期、大曆（七六六〜七七九）から貞元（七八五〜八〇五）を中心に活躍した人物である。「全唐詩」などに百十数首を伝える詩人であり、後漢末期の蔡琰の「胡笳十八拍」を踏まえて作った同題の詩が著名である。また、この時期に流行した樹石画の代表的な画家の一人であり、自分の画に添えた題画詩も残されている。晩年は道教に傾倒して山中へ隠れ、地仙になったとの伝説を生むなど多彩な経歴をもつ。

筆者が最初に興味を抱いたのは、専攻である絵画史の面からであった。樹石画については、晩唐（九世紀後半）の張彦遠が、『歴代名画記』（八四七年序）巻一の「山水樹石を画くことを論ず」において、彼のほか韋偃（鷗）、張璪、王維、楊炎、朱審、王宰など中唐頃に活躍した著名な樹石画家の名前を挙げており、この時期に大きく発展を遂げたことを伝えている。

中唐は、安史の乱（七五五〜七六三）を契機に唐王朝が徐々に衰退へと向かっていく時期であるが、絵画史では従来の線描主体の画法とは一線を画す、偶然にできた墨面から連想を働かせて作画してゆく潑墨画な

ど新たな動向が生まれてきた。松や柏（ヒノキの類）を岩石とともに描く樹石画の流行もその動きの一つであり、これまでも、絵画史的意義や画風の検討などが行われてきた<sup>1)</sup>。しかし、個々の画家の研究や主題面、様式面を始め、樹石画が当時担った歴史的な意義を掘り下げる作業はまだ途上の段階にある。

筆者は、これまでも唐宋山水画についていくつかの論考を公にしてきたが、中唐の樹石画家達がどのように生き、制作を行ったのか、彼らにとって樹石画とはどのような意味を持っていたのかについても考えてみたいと常々思ってきた。安史の乱とほぼ相前後して発達してきたこの画題には、単なる画法の進展だけではなく、それを支えた精神的、社会的背景が内在しているのではないかと考えられるからである。<sup>2)</sup>

ただ、この時期の樹石画の実作品は、現存しておらず、文献資料も多くはないため、個々の画家の生涯や制作活動を具体的にたどることは困難である。上述の「山水樹石を画くことを論ず」に挙げられた画人達にしても、活動時期がやや早く、盛唐を代表する詩人として有名である王維（六九九〜七五九）は別格として、韋偃、張璪、朱審、王宰については略伝と幾つかの題画詩などの限られた資料が伝わるのみである。宰相として両税法を施行するなど政治上の重要な働きをした楊炎（七二七〜

七八一)についても、文集は現存しておらず、わずかに詩二首を『全唐詩』卷二二二に、文一八篇を『全唐文』卷四二二、四二二に録するに過ぎない。

これに比して、劉商については、なお幾分の資料が残されている。詩に加えて、同時代の武元衡(七五八〜八一五)が彼の文集に寄せた序文が伝わり、『歴代名画記』の他、唐・朱景玄『唐朝名画録』、南唐・沈汾『続仙伝』、元・辛文房『唐才子伝』などにも略伝が載せられている。人生の細部まで浮き彫りにするとは言えないが、生涯を当時の時代状況と合わせてうかがうことは可能である。

ただし、そのためには文学や歴史、宗教などからの多角的な分析が要求される。筆者は絵画史を専攻する者で、この作業に必要な素養を十分に備えている訳ではない。しかし、たとえそうであっても、一人の画家の生き方を生涯にわたって検討していく作業は、この時代の樹石画の研究に厚みを与えていくきっかけにはなるのではと考えて、考察を行うこととした。この主要な樹石画家の伝記を一度は検討しておかなくては、樹石画研究における次の段階に進めないとの思いもある。

以下、考察の順序としては、始めに基礎資料となる劉商の詩のテキストについて確認し、次に官歴を中心とする伝記と詩作について考え、その上で作画活動、晩年の道教への傾倒へと進むこととした。

## 一 現存する劉商詩のテキスト

劉商の文集は、『新唐書』卷六〇、芸文志四に「劉商詩集十卷」として著録され、南宋・陳振孫『直齋書錄解題』卷一六では「劉虞部集十卷」、「宋史」卷二〇八、芸文志七でも「劉商集十卷」とあり、元・辛文房『唐

才子伝』(一三〇四年序)卷四も「有集十卷、今伝」とするが、元以降に散逸し、もとの状態を保つテキストは残っていない。ただ、同時代の宰相・武元衡が寄せた序文「劉商郎中集序」(『文苑英華』卷七一三)が伝わり、それによると、劉商の没後に、その遺作が劉商の子によって武元衡のもとに届けられ、序文が作られたこと、文集には、詩二七七編及び「胡笳十八拍」が収録されていたことなどが分かる。

現存する諸本のうち最も多くを収めているのは、清・康熙帝の勅撰による『全唐詩』(一七〇七年)で、卷三〇三、三〇四に計一一五首、及び残句二件、卷八八三、補遺二に一首を収録する<sup>4)</sup>。武元衡序に言う二七七編と「胡笳十八拍」を足した合計数二九五に対して、約四割の作品が伝わる計算になる。

『全唐詩』には五言古詩(二首)、七言古詩(二七首)、五言律詩(一〇首)、七言律詩(二首)、五言排律(二首)、五言絶句(一一首)、七言絶句(六一首)の順に詩形ごとに配列されている。普及の度合いから最も参照しやすいテキストではあるが、清の前期に編纂された総集であるから、より時代の遡るテキストに当たる必要がある。

その一つは六朝末から唐の詩文を集めた北宋・太宗勅撰の『文苑英華』(九八七年)である。劉商詩の収録数は二一首にとどまるが、このうち古詩、律詩、排律が計一八首を占めており、これら絶句以外の部分に關して言えば、「胡笳十八拍」を除いた大半がこの本で確認できる。ただし、現存詩の六割を占める絶句は三首しか収録されておらず、『全唐詩』が何に基づいて採録したかが問題となる。

『全唐詩』は、主に胡震亨輯『唐音統籤』(一六三五年頃)と錢謙益・季振宜輯『唐詩』(一六七三年序)という明末清初に作られた二つの総集をもとに編纂された。前者は上海古籍出版社より影印本(二〇〇三年)

が、後者は聯経出版事業公司より『全唐詩稿本』の名前で影印本（一九七九年）が出版され、参照しやすくなった。<sup>5)</sup> 両書に当たってみたところ、『全唐詩』の劉商詩は、ほぼ『唐詩』を底本とし、一部を『唐音統籤』によって補っていることが分かった。影印本『唐詩』は、台湾の国立中央図書館に所蔵される錢謙益と季振宜自身の手稿本で、底本となる版本がある場合には、その版本自体を適宜切り貼りして添削を加えており、何らかの理由で版本を直接使用できない場合は筆写しており、編集の過程を具体的に知ることができる。劉商の部分（卷二四五（第三一冊））は、始めの古詩、律詩、排律の部分が筆写で、配列には後述の『劉商』（『十三唐人詩 増八劉唐人詩』所収）と類似点が認められるもの、底本を突き止めるには至らなかった。しかし、絶句に関しては南宋の洪邁（一一二二—一二〇二）が編纂した『万首唐人絶句』（一一九二年）を切り貼りしていることから、これが底本だと確認できた。<sup>6)</sup>

『万首唐人絶句』には、唐代以外の作品も混入するなどの点から後世の非難もあるが、<sup>7)</sup> 劉商詩については、伝記類によって知られる経歴と結び付くものが多く、両者をつき合わせることで劉商の生涯をより具体的に把握することが可能である。彼は題画詩も複数残しており、絵画史的にも重要であるが、従来、それらに言及する際には『全唐詩』が引かれることが多く、筆者も信頼性の判断に迷うところがあった。しかし、『文苑英華』によって大半が確認できる古詩、律詩、排律に加え、絶句の部分も『万首唐人絶句』からの引用と分かったこと<sup>8)</sup>で、少なくとも現在残されている劉商詩のほとんどが、宋時代に知られていたと確認できた訳である。<sup>9)</sup>

従って本稿では劉商詩の使用に際しては、原則として『文苑英華』、『万首唐人絶句』の順に優先して底本とすることとし、参照の便を考え

て『全唐詩』も含めた三書の収録巻数を、英、万、全の略号を付して明示する（『文苑英華』、『万首唐人絶句』に未収録の場合には、適宜他本を用いる）。

なお、劉商詩のテキストとしてほかに知られるものには、前述の『唐音統籤』に加え、『劉虞部詩集』四卷（清・席啓寅輯『唐詩百名家全集』（一七〇二年序）所収）と『劉商』一卷（清・劉云份輯『十三唐人詩 増八劉唐人詩』（一七〇三年序）所収）がある。いずれも明末清初の成立で、収録作品も『全唐詩』の範囲を超えるものはないが、参考までにそれぞれの性格を述べておく。

『唐音統籤』は、卷三〇九、三一〇に計一二首と残句二件を収録する。詩形による分類を行う点は『全唐詩』に類するが、なおかつ各詩形の中で送別詩や題画詩などの主題面のまとまりも意識した配列が見られる点に特徴がある。

『劉虞部詩集』は、九一首を収録（「十八拍」は未収）する。配列は詩形、主題、制作年代のいずれの分類も行っておらず、かなり錯綜した印象を受ける。字句も他本と比較して本書のみが異なる部分があり、孤本的な性格を示す。

『劉商』は、一一一首を収録し、不完全ではあるが詩形を意識した配列となっている。重要なのは、『唐詩』（『全唐詩稿本』）と収録の順序に類似が認められる点で、それが絶句以外の部分にも及んでいることから、『唐詩』が『万首唐人絶句』以外で参照した底本と同系のテキストに基づいた可能性がある。<sup>10)</sup>

以上、劉商詩のテキストについて検討を行った。次章では、出自や官歴を中心にその伝記をたどり、現存する詩がどのような状況で作られ、どのような心情や思想が詠われているのかを考察する。

## 二 劉商の官歴と詩作

劉商の伝記を知る上で、現存詩及び武元衡序の他に参照すべき主な文献を列記すると次のようになる。<sup>11)</sup>

- ①唐・朱景玄『唐朝名画録』（八三六年以後）能品上、劉商条
- ②唐・張彦遠『歴代名画記』（八四七年序）卷一〇、劉商条
- ③南唐・沈汾『統仙伝』劉商条（『太平広記』卷四六にも引用）
- ④前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』劉商条（『太平広記』卷六に引用）
- ⑤南宋・計有功『唐詩紀事』卷三二、劉商条
- ⑥南宋・史能之『咸淳毘陵志』（一二六八年序）卷二五、僊釈、劉商条
- ⑦元・辛文房『唐才子伝』（一三〇四年序）卷四、劉商条
- ⑧元・夏文彦『図絵宝鑑』（一三六五年序）卷二、劉商条

これらのうち最も成立時期が早いのは、唐において画史・画論の方面から記された①、②である。作画についての情報を中心とし、記述は簡潔であるが、唐代の記録として重要である。

③、④はともに五代の撰述。仙人の伝記を集めた所謂仙伝で、劉商の道士、仙人としての性格を記すことに主眼がおかれているが、彼の晩年の経歴を知る上でも参考となる。

⑤は唐代の詩人の伝記や詩にまつわる話題を収録し、劉商条では劉禹錫（七七二〜八四二）が劉商の甥・劉仁師のために撰した「高陵令劉仁師遺愛碑」を引いている点が目される。

⑥は劉商が晩年に隠棲した毘陵（江蘇省）の地方誌で、彼を仙釈に分類し、③の記述を踏まえる。

⑦は唐代詩人の伝記集である。撰述年代は下がるが、元代には伝来して現在では失われた資料も用いており、唐代詩人についての基本図書である。劉商については、現存する詩と対応する内容も散見される。

⑧は元までの画人を集めた画家伝で、劉商条は主に①、②を参照して簡潔にまとめている。以下、これらの資料に基づきつつ、彼の生涯と詩作について検討する。<sup>12)</sup>

劉商は、字を子夏といい、彭城（江蘇省徐州）の人で、長安に家したという（武元衡序および文献③、⑦など）。太宗朝（六二六〜六四九）に刑部尚書となった劉徳威の家系という名門の出身で、徳威の子、延景は陝州刺史、延景の子の瑗は国子祭酒となり、また娘は睿宗（在位七五六〜七六二）の妃となって肅明皇后を追冊されている。瑗の子の為輔は岐州司馬となり、為輔の子が商である（『新唐書』卷七一上、宰相世系表、『元和姓纂』卷五）。<sup>13)</sup>

生年は不明であるが、後述するいくつかの経歴から開元二六年（七三八）前後と推測される。また、没年については、彼の没後に作られた武元衡序が、武元衡の劍南西川節度使在任中の元和二〜八年（八〇七〜八一三）の作と考えられることから、その頃とされている。<sup>14)</sup> 時代状況を踏まえれば、繁栄を誇った盛唐の中でも爛熟期である天宝年間（七四二〜七五六）に少年期を過ごし、安史の乱期に青年時代をおくり、乱後の藩鎮勢力が割拠した中唐前期、大曆（七六六〜七七九）、貞元（七八五〜八〇五）を中心とする時期に壯、老年期を送ったことになる。文学史の分野では、大曆十才子と称される盧綸、韓翃、錢起、司空曙ら中唐前期の代表的な詩人達と同時の人物と捉えられる。

彼は早年に「胡笳十八拍」<sup>15)</sup>を作り（武元衡序）、児童や婦女の愛唱す

るところとなったという(文献③)。これは、後漢末期の蔡琰(字は文姫)が、匈奴に捕えられて左賢王に嫁ぎ、一子を生んだが、後に曹操(一五五―二一〇)によって連れ戻され、その運命の悲哀を詠った「胡笳十八拍」に擬して作ったものである。蔡琰の「胡笳十八拍」については、作者の真偽をめぐる多数の議論があるが、今この問題について付け加えるべき材料を持ち合わせてはいない。ただ、劉商が若い時期にこの題材を取り上げ、それが流行することになったのは、当時の世相と大いに関係があると考えられる。

安史の乱を平定したものの、弱体化した唐王朝は、吐蕃や迴紇の侵攻、略奪を度々受けることとなり、史書には民や物資が略奪に遭った記録が散見される。特に広徳元年(七六三)には、吐蕃が長安を占領し、代宗(在位七六一―七七九)が一時都から非難する事態まで起こっている(『旧唐書』卷一九六上、吐蕃伝上)。王朝弱体化の中で、和議のために皇女を異民族の王に嫁がせることもしばしば行われている。例えば、肅宗の乾元元年(七五八)には、実の皇女である寧国公主が迴紇の毗伽可汗に嫁いだ。翌年、可汗が没し、殉死させられそうになったものの、結局はまぬがれて帰国している(『旧唐書』卷一九五、迴紇伝)。劉商が「胡笳十八拍」を取り上げた背景には、このような世相があり、また、それゆえに人口に膾炙したと考えることができよう。

官歴については、進士に及第したとされるが(文献③、⑦など)、正確な時期は不明である。祖父・瑗が国子祭酒を務めたことを考えれば、家の学問伝統を継いだものであろう。なお、科挙受験生を送った詩に「送李元規昆季赴举」(英二七八、全三〇三)、「送楊行元赴举」(万四二一、全三〇四)があり、前者では「明朝 礼処を問わば、暫く覚えよ 鴈行稀なり」と『礼記』王制篇の「兄之齒雁行」(兄の年輩の人とは、並ん

でやや下がって歩くこと)の記述を踏まえて科挙への助言を贈っている。

その後の経歴でまず明らかなのは、合肥(安徽省)の県令を務めたことである(文献④)。淮南節度使・崔円の治政を顕彰した李華「淮南節度使尚書左僕射崔公頌德碑銘并序」(『唐文粹』卷五四)に、合肥令として彼の名が見え、この文が大暦元年(七六六)に撰述されたと見られることから彼の在職年代もこの頃と考えられている。

合肥令時の作に、鄭明府なる人物に寄せた「合肥至日愁中寄鄭明府」(全三〇三、南宋・蒲積中輯『歲時雜詠』卷三九)があり「計を失して卑吏と為り、三年 楚郷に滞まる。世俗に随う能わず、応に是れ行蔵昧かるべし」、「魚竿 今尚お在り、此れ行きて滄浪に棹せん」と、世俗に身を置くのを善しとせず隱遁への志向を述べている。また、これによって少なくとも三年以上、同職にあったことが分かる。

本詩は、劉商の年齢を考える上でも注目される。「暮天に郷思乱る、曉鏡に鬢毛蒼し」と、髪に白髪がまじりはじめたことを言っており、彼が既に壮年に差し掛かっていることを窺わせる。儲仲君氏は、唐代の進士が県令に進むまでには、ある程度の年月が必要として、劉商の登第を肅宗朝(七五六―七六二)頃、生年を開元中(七一三―七四一)との見解を取る。氏は詳しい考察の過程は示されていないが、今仮に彼が天宝元年(七四二)に生まれたと考えた場合、合肥県令時の大暦元年(七六六)は二五歳となり、やはり若すぎることから、儲氏の推定は穩当と言えよう。

この他に合肥での作と判断できるものには、「泛舒城南溪賦得沙鶴歌奉饒張侍御赴河南元博士赴揚州拝觀僕射」(英二八五、全三〇三)、「送劉實北歸」(万四二一、全三〇四)などがある。後者においては、北へ帰る実弟に対して「知る 爾が素山水の興多きを、此の回 歸り去つて更

に来るや無や」と述べ、山水への愛好を詠っている。

その後の経歴は、資料によって記述に差が見られる。『新唐書』宰相世系表は「檢校虞部郎中」を務めたとするが、同書、芸文志の注記では「貞元の比部郎中」とする。また、『元和姓纂』では「檢校郎中」、「唐朝名画録」では「郎中」とするのみである。やや詳しいのは、『歴代名画記』で、「官は檢校礼部郎中、汴州觀察判官に至る」とし、『唐詩紀事』もこれに従う。『唐才子伝』は「貞元中、比部員外郎に累官し、虞部員外郎に改められ、数年して檢校兵部郎中へ遷る。後に出て汴州觀察判官と為る」と詳しい記述をみせるが、これは上述の先行する文献を参照して整合を図ったものと見られる。

このような諸書の食い違いについて、儲仲君氏は、檢校官が節度使・觀察使の幕府に辟召された者への俸給を定めるための寄禄官として与えられる場合が多いことから、彼が檢校郎中を与えられたのは汴州觀察判官を務めていた折であろうとし、その時期は永平軍節度使・李勉（七一七～七八八）が、汴州觀察使を兼ねた大曆十一年（七七六）から建中四年（七八三）の間の可能性が高いとされる。

筆者も、唐代の節度使、觀察使の地域ごとの変遷に関する参考文献に当たってみたが、劉商の合肥令在任以後である大曆から江南に退隱する貞元のはじめまでに、汴州觀察使に任ぜられたのは李勉のみである。劉商が汴州觀察判官時に作ったと考えられる詩には、「行營送人」、「春日行營即事」、「行營即事」、「行營病中」などがあり、それらの内容には李勉の動向と関連すると思われる点が少なくない。そこで、史書に見える李勉幕府がたどった経過を追いながら、劉商詩の内容を検討し、両者の関係の可能性を探ってみよう。

李勉は、高祖・李淵（在位六一八～六二六）の玄孫にあたる宗室の出

身で、嶺南節度使などを歴任し、宰相も務め「宗臣の表」と称えられた人物である。詩文、絵画など文芸を愛好し、自ら琴を作るほどであった（『旧唐書』卷一三二、『新唐書』卷一三二）。このことから李勉が自らの幕僚として詩画を善くした劉商を招いた可能性が考えられる。

李勉が永平軍節度使、滑州刺史に任じられたのは、大曆八年（七七三）のことである。以後、大曆十四年（七七九）に汴州刺史を兼任して汴州（河南省開封）に鎮を移すまで滑州（河南省滑县）に在した。劉商には、「滑州送人先婦」（英二七八、万四二、全三〇四）があり、汴州だけでなく、ここでも李勉と活動範囲が重なってくる。

河水氷消鴈北飛

河水氷消えて 鴈北へ飛ぶ

寒衣未足又春衣

寒衣未だ足らざるに 又春衣となる

自憐漂蕩經年客

自ら憐む 漂蕩に年を経るの客

送別千廻独未帰

送別は千廻なるも 独り未だ帰らず

季節は早春、何度も人を送るが、自分はなかなか帰れないと嘆いている。辟召後、ある程度の期間を経ての作とみられ、彼が李勉の滑州滞在期に、既に幕下に入っていたことも考えられる。

李勉が永平軍節度使を務め滑州や汴州を治めた期間は、安史の乱後の残存勢力である盧龍、成徳、魏博の所謂河朔三鎮を中心に藩鎮が跋扈し、朝廷側との争いが絶えなかった時期で、李勉も度々出兵している。劉商もこのような状況下、従軍の機会が多かつたらしく、駐留地である行營での詩が複数作られている。その一つ「行營送人」（万四二、全三〇四）では、次のように詠う。

鞞鼓喧喧対古城 鞞鼓喧喧として 古城に対し

独尋帰鳥馬蹄軽 独り帰鳥を尋ねて馬蹄軽し

回来看覓鷺飛処 回り来たつて見て覓む 鷺の飛ぶ処

即是將軍細柳營 即ち是れ將軍細柳の營

人を送つて戻つてみると、鷺が飛び交っているのが見える。あれこそ我が將軍の陣營だ。「細柳營」は、前漢の周亜父が細柳（陝西省咸陽）に陣した際、文帝から規律の嚴肅なるを以つて称された故事（『漢書』卷四十、周亜父伝）に由来するが、同時に新緑の柳の美しさをも言っているのである。戰場にあつても、季節の美しさに目を向けようとする詩人の心境がうかがえる。

けれども、打ち続く戦乱の中で、彼の心は沈鬱な方向へと向かつていったようである。大曆十一年（七七六）、汴州節度使の田神功と弟の田神玉の相次ぐ死去にともない、一旦は李勉が汴州刺史、汴宋等八州節度觀察留後の兼任を命じられた。ところが、田氏の武將・李靈耀が抵抗したため、朝廷は討伐軍を派遣し、李勉も参戦。一〇月にこれを平定し、結局、淮西節度使の李忠臣が汴州刺史を兼任することとなった。

李勉が汴州を治めることになったのは、大曆十四年（七七九）三月、李忠臣が配下の李希烈（？七七八六）によつて淮西節度使の地位を逐われたためである。汴州刺史を兼ね、治府も汴州に移すこととなった。この歳の五月に代宗（在位七六二―七七九）は崩御し、徳宗（在位七七九―八〇五）が即位した。李勉は中書門下同平章事を加えられて宰相の列に加わることとなった。

建中二年（七八一）正月、成徳節度使・李宝臣が没すると、藩鎮世襲の風を除こうとする徳宗は、その子・李惟岳の継承を否認。成徳は魏博、

平盧などと同盟関係にあつたので、これら諸藩と朝廷の間に緊張が高まつた。五月、魏博の田悦、平盧の李正己（程なく没し、子の李納が勢力を引き継ぐ）、成徳の李惟岳が拳兵し戦乱が始まつた。

この戦は、建中三年（七八二）のはじめには、官軍が田悦を魏州に追いつめ、また李惟岳が部下の王武俊によつて殺されるなど、最初は有利に展開した。河南の諸軍が、李納を濮州に攻め、李勉が投降を勧める局面もあつた。劉商には、晩春の曹南（曹州の南、李勉軍と李納軍の境界付近）における戦勝を詠った「春日行營即事」（万四二、全三〇四）がある。

風引双旌馬首齊 風は双旌を引いて 馬首齊しく

曹南戦勝日平西 曹南に戦勝つて 日西に平らなり

為儒不解従戎事 儒と為つて解せず戎事に従うを

花落春深聞鼓聲 花落ち春深くして鼓聲を聞く

興味深いのは「儒と為つて 解せず戎事に従うを」と、自らは儒者であるため戦の事は解しないとしている点である。『論語』衛靈公篇の「軍旅の事は、未だこれを学ばず」との孔子の言に端的に表れているように、儒教では軍事の才能は本質的な能力とはみなされなかつた。

首を揃えて颯爽とならぶ騎馬隊、戦勝に沈みゆく太陽。けれども自分には戦のことは分からない。過ぎ行く春に思いをよせるその姿は、陣營にあつて置き所のない孤独を感じているようにもみえる。

また「行營即事」（万一五、全三〇四）は、次のように言う。

万姓厭干戈 万姓 干戈に厭く

三辺尚未和 三辺尚お未だ和せず

將軍誇宝劍 將軍 宝劍を誇る

功在殺人多 功は人を殺すこと多きに在り

三辺が未だ和に応じておらず、人民は戦に辟易しているという。三辺とは、朝廷に反抗している魏博の田悦、平盧の李納、成徳の李惟岳ないしはそれを殺害して台頭した王武俊の三勢力を指すとみるのが妥当であろう。將軍は、宝劍を誇るけれども、功名は結局人を多く殺すことにある。繰り返される戦闘に、やるせなさが漂っている。

官軍の有利は長くは続かなかつた。一月には、盧龍節度使の朱滔を盟主に田悦、王武俊、李納が同盟して体制を立て直す。さらに悪いことには、淮西の李希烈までが反旗を翻し、汴州へ侵攻してきたのである。

建中四年（七八三）、正月、李希烈は汴州の西南にある汝州を攻めた。朝廷は、兵を派遣し、諸道に命じて李希烈を討たせた。李勉は淮西招討使に任じられたが、許州攻略と洛陽への救援の失敗、襄城を落とされるなど敗退が続いた。一〇月には、襄城救援のために派遣された官軍が長安を経過した際、朱滔の兄で当時長安に滞在していた朱泚（七四二―七八四）を擁立して都で乱を起こし（朱泚の乱）、徳宗は翌年の平定まで奉天に逃れることとなった。二月、ついに李希烈によって汴州が陥落し、李勉軍は宋州に逃れ、彼の汴州統治は終わりを告げることとなった。

劉商は、この時期、従軍の疲労もあってか病を患っており、「行営病中」（万四二、全三〇四）には、次のように心境を述べる。

心許征南破虜婦 心に許す 征南 虜を破つて帰るを

可言羸病臥戎衣 言うべし 羸病 戎衣に臥すと

遲遲不見憐弓箭 遲遲として見ず 弓箭を憐れむ

惆悵秋鴻敢近飛 惆悵す 秋鴻の敢えて近くを飛ぶを

南方との戦であること、「秋鴻」とあるように季節は秋と考えられることから、この年の李希烈討伐における陣営での作との推定が得られる。「心に許す 征南 虜を破つて帰るを」と言うように、彼の胸の内にも戦の勝利を期す気概が無いわけではなかったが、病に伏せており、弓矢も久しく取ることができず、秋雁が警戒もせず近くを飛んでいく。おそらく四十代の後半にかかっており、この後いくばくも無く病を称して退隠することを考えれば、既に何らかの持病があったことを思わせる。

翌年（七八四）正月、徳宗は興元と改元し、詔を発して天下に赦し、李希烈、田悦、王武俊、李納らを許すこととした。朱泚も六月にはその部下によって殺され、徳宗は七月には都に帰ることができた。李希烈は引き続き反意を示したが、本年をもって節度使の反乱は一時収束を向かえた。しかし、それは徳宗の藩鎮抑制策の失敗を意味し、藩鎮問題は憲宗（在位八〇五―八二〇）へと持ち越されることとなった。

以上、李勉の動きを中心に、大暦から建中頃の汴州周辺地域の状況をたどり、併せて劉商詩の制作年代の推定とそこに見える心の動きを探ってみた。その結果、詩に見られる彼の行動地域や戦に関する情報は、李勉の動きとも複数の点で合致し、李勉に仕えた可能性がさらに高まったと考えられる。推察するに李勉という有力な宰相の幕僚となつてみたものの、実際は従軍の機会が多く、落ち着いて詩画を制作する時間はもちろん、儒者としての資質を発揮できる機会も、そう多くはなかったというの、彼の汴州觀察判官時の状況だったのでないか。不慣れた従軍に加え、病による体力の衰えは、そんな彼の気持を官界から遠ざけ、退



隠へと向かわせる結果になったように見える。この興元元年、正月、宣武軍節度使の劉洽が、汴滑宋亳都統副使を加えられるに及んで、李勉はその配下を譲っている。劉商が病を称して官を辞したのは、この頃であったと思われる。

官を辞して後の劉商は、恐らく運河を使って江南へと下ったものと推測される。まず滞在が確認されるのは、淮河下流の都市・楚州（江蘇省淮陰）である。陶敏氏の考証によると、劉商「送元使君自楚移越」（万四二、全三〇四、「三体詩」<sup>(32)</sup>にも収録）の元使君は、北宋・孔延之「会稽掇英総集」（一〇七二年序）巻一八、「唐太守題名記」から元亘のことと考えられ、貞元二年一二月に楚州刺史より会稽の太守になったことが分かるので、詩は貞元三年（七八七）の春、元亘が任地へ向かう送別の折に作られたと考えられる。<sup>(33)</sup>

楚州での作として、もう一つ重要な詩に「春日臥病書懷」（全三〇三、「三体詩」）がある。やはり病床の作であり、この時期の彼の心境がよく表れている。<sup>(34)</sup>

楚客経年病	楚客	年を経て病み
弧舟人事稀	弧舟	人事稀なり
晚晴江柳変	晚晴	江柳変じ
春暮塞鴻帰	春暮	塞鴻帰る
今日方知命	今日	方に命を知る
前年自覚非	前年	自ら非を覚る
不能憂歳計	歳計を憂うる能わず	
無限故山薇	無限なり	故山の薇

首聯から頷聯にかけては、白らを「楚客」と称して、数年来、病にあることと、晩春の様子が述べられる。重要なのは次の頸聯で、「今日方に命を知る」は、『論語』為政篇の「五十にして天命を知る」を踏まえていることは言うまでもない。さらに「前年自ら非を覚る」は、陶淵明「帰去来兮辞」に「今の是にして昨の非なるを覚る」、「淮南子」原道訓に「蘧伯玉、年五十にして、四十九年の非有り」とあるのに依る。『論語』と『淮南子』を考え合わせると、本詩は劉商五十歳頃の作と判断でき、これを上述の貞元三年前のこととすると、劉商の生年は開元二六年（七三八）前後との推定が得られる。この数字は先の合肥令就任時の年齢の考察とも矛盾しない。楚州滞在の正確な期間が不明のため、これ以上の特定は困難だが、以上の点から彼の生年は開元二六年頃と考えて大過ないと思われる。

尾聯は「年ごとの生計を心配する必要はない、故郷の山には薇がいくらでも生えているのだから」と、殷滅亡後、周に仕えるのを善しとせず、首陽山へ隠棲し薇をとって暮らした伯夷、叔斉の故事（『史記』巻六一、伯夷伝）を踏まえて、帰遁への意志を述べる。

楚州滞在後は、さらに運河を南下したらしく、揚州（江蘇省）に滞在している。同地で作られた詩に「雜言同豆盧郎中郭南七里橋哀悼姚倉曹」（全三〇三）、「高郵送弟遇北遊」（万四二、全三〇四）などがあり、寶常の邸宅に宿した際の「白沙宿寶常宅觀妓」（万四二、全三〇四）は、寶常が白沙（揚州）にいた期間が、貞元四年（七八八）頃、一四年（七八八）であることによって、劉商の揚州滞在時期を考える参考となる。<sup>(35)</sup>この後、劉商は道教の聖地・茅山（江蘇省句容）へ行き、さらに宜興（江蘇省）の山中に隠れ住むのであるが、それらについては後述することとし、次章では画家としての活動に目を向けてみよう。

なお、本章の締めくくりとして、彼の作詩の全般的な傾向について、所謂大曆詩との関係から簡単に述べておきたい。一般に大曆詩の傾向として、詩人の身辺のことや交遊、それにとまなう感情を繊細に表現したものが多く、贈られた詩の韻に合わせて返答の詩を作る和韻が増加するなど技巧的な面は注目されるが、盛唐の李白や杜甫に代表される雄渾、悲壮な詩風は影をひそめたことが指摘されている。<sup>36)</sup>

劉商においても、若年の「胡笳十八拍」は、同時代の異民族の侵入が背景として考えられるものの、政治批判などの積極的な態度は認め難く、また、「春日行宮即事」において見たように儒者たる意識はあったものの、自らが積極的に政治に関与し、世の中を自分の力で変革しようという意欲が表れた詩も見出し難い。

題材の中心は、この時期の詩人の例に漏れず、自らの周囲に関係する事柄、特に人との交遊、送別の際の詩である。それらを見て感じるものは、結句を中心に相手への思いや別離の情が、誇張や修飾ではなく等身大の素直な感情の発露として詠われている点である。師の左遷を悲しむ「懷張瓌」や、友人との別れを詠って『三体詩』にも収録された「送王永」は、その代表的な例である。<sup>37)</sup>

この時期に始まる和韻の作が彼にあつたかは定かでないが、むしろ修辭の技巧よりも、内容面における平明な理論的展開の中に機知を交えたものが注目される。自分の隠棲の地を洞窟の内側にある仙境に見立てた「題水洞二首」は、その典型的な例である。<sup>38)</sup>

### 三 画家としての活動

冒頭に述べたとおり、劉商は、中唐に発展した樹石画を得意とした画

家としても知られた。<sup>39)</sup>『歴代名画記』（前章、文献②）に「工みに山水樹石を画く。初め張瓌を師とし、後には自ら真に造るを意と為す」とあるように、同時代の樹石画の第一人者である張瓌に師事して一家をなした。

また、『唐朝名画録』（文献①）に「松石、樹木を画くことを愛す。格性は高邁なり。時に畢庶子（畢宏）有りて、亦た松樹、水石を画くを善くす。時人云う、劉郎中（劉商）の松 樹は孤標、畢庶子の松 根は絶妙」とあるように、その画技は年長の著名な樹石画家・畢宏と併称されるほどであった。

武元衡序では「文を著すの外、丹青を妙極す。好事の君子、或は冰素を持ちて、淮湖を越え、一松一石、片雲孤鶴さえ求め、獲る者は之を宝とす」とされ、江南に隠居してからは、画を求めて訪れる人が多かった。この時代の多くの画家と同様、作品は現存しないが、本章では題画詩などの文献面から、彼の作画について考察する。

劉商には以下に挙げる六首の題画詩が伝わっている。樹石画について詠った唐代の題画詩は多数知られているが、劉商の詩は樹石画家自身が詠んだものとして貴重である。けれども、絵画史の資料として詳しい分析はなされていないため、それらを書き下して紹介し、検討を加えてみたい。<sup>40)</sup>

① 袁徳師求画松（万四一、全三〇四） 袁徳師画松を求む

柏偃松斂勢自分 柏は偃し松は斂は勢自ら分る

森梢古意出浮雲、 森梢の古意 浮雲を出づ

如今眼暗画不得 如今眼暗くして画き得ず

旧有三株持贈君 旧三株有り 持して君に贈らん

袁徳師という土人の求めに対し、視力が衰えたため、以前に描いた三株の画松を贈ったもの。袁徳師は南陽公に封ぜられた袁恕己の孫で、貞元六年（七九〇）から宜興（江蘇省）の尉を務め、その後、常州（江蘇省）の軍事判官となったことが知られている。後述のように劉商は晩年に宜興に隠棲しており、本詩は貞元六年、袁徳師が宜興に赴任して以後の作と考えられる。

② 画樹後呈濬師（万四二、全三〇四） 樹を画きて後 濬師に呈す

翔鳳辺風十月寒 翔鳳の辺風 十月寒く

蒼山古木更摧残 蒼山の古木 更に摧残す

為君壁上画松柏 君が為に壁上に松柏を画く

勁雪嚴霜君試看 勁雪 嚴霜 君試に看よ

濬師は僧であろうが、詳しいことは分かっていない。僧坊の壁に松柏を描いたものであろう。季節は冬となってきたが、君の為に描いた壁上の松柏は、霜雪にも耐えるだろう、試しに見てやってほしいと言う。

③ 与湛上人院画松（万四二、全三〇四） 湛上人の院に画松を与う

水墨乍成巖下樹 水墨乍たちち成る 巖下の樹

摧残半隠洞中雲 摧残半ば隠る 洞中の雲

猷公曾住天台寺 猷公曾て住す 天台寺

陰雨猿声何処聞 陰雨猿声 何れの処にか聞かん

湛上人なる僧侶の院に画松を描いた際の詩である。転句から天台と関

係する僧かと考えられるが不詳である。起句は「水墨」の用語の初出的な例として知られている。「水墨乍ち成る 巖下の樹」という表現から、彼の樹石画が水墨表現を用い、山水描写をともなっていたことが分かる。

④ 山翁持酒相訪以画松酬之（万四二、全三〇四） 山翁酒を持して

相訪う、画松を以て之に酬ゆ

白社風霜驚暮年 白社の風霜 暮年に驚き

銅瓶桑落慰秋天 銅瓶の桑落 秋天を慰む

憐君意厚留新画 君が意厚きを憐れみ新画を留む

不著松枝当酒錢 松枝を著もつて 酒錢に当てざれ

山に隠棲する翁が酒を持ってきてくれたのに対して、お礼として画松を描き与えたもので、隠棲後の作と判断される。白社は茅屋で、桑落は酒の別称である。結句は、松の枝を描いたけれど、酒代に換えたりしないでくれよとの意に解しておく。

⑤ 酬道芬寄画松（万四二、全三〇四） 道芬が画松を寄するに酬ゆ

聞道鉛華字沈寧 聞道 鉛華は沈寧を字ぶぶと

寒枝浙瀝葉青青 寒枝は浙瀝として葉は青青

一株将比囊中樹 一株は将に比せんとす囊中の樹

若箇年多有茯苓 若箇いすれの年に多く茯苓有りや

同じく樹石画で知られる画僧・道芬から画松を贈られての詩である。道芬は会稽の僧であるから（『歴代名画記』巻一〇）、劉商の江南移居後に、同じ樹石を善くする画家同士として交流があったのだろう。起句で

は「鉛華(画)は沈寧を学ぶ」として、道芬の師が明らかにされている。沈寧は『歴代名画記』巻一〇によれば、張璪に学んだとされるから劉商と道芬は、同じ画流を継ぐ関係にあったことになる。画僧に対しての詩であるが、「この一株の画松は袋に入れてやって来た囊中の樹と称すべきもの。何年ぐらいたったら茯苓(松に生える仙薬の一種)を多く付けるだろうか」と戯れている。

⑥ 画石(万四二、全三〇四) 画石

蒼蘚千年粉絵伝 蒼蘚千年 粉絵伝う  
堅貞一片色猶全 堅貞一片 色猶お全し  
那知忽遇非常用 那ぞ知らん忽ち非常の用に遇うを  
不把分銖補上天 分銖を把りては上天を補わす

苦むした岩石を描いた画についての詩。石を、永年不変の堅貞の存在と見、さらに伝説の女神・女媧が天の欠けた際、五色の石を錬って補ったという『淮南子』覽冥訓などに見られる故事を引く。転句、結句は難解だが、ひとまず次のように解しておく。「どうして知っていようか、急に非常の用に遇おうことなど(そのようなこと、あろうはずもない)。(天に比べれば)分・銖といったちっぽけなこの石で天を補うことなどあるはずもない」。或は、自作の画石を、謙遜を交えながら詠んだ可能性もある。

これらのうち、①④の四首は自作の画を人に与えた際に詠まれたものである。画題はいずれも松石図で、彼の作画の中心が樹石画にあったことが分かる。相手は、士人、僧侶、隠者と幅広く、掛幅や障屏など通

常の観賞用と推測される①や、壁面による比較的大画面の制作と思われる②と③、即興的と思われる④など、制作の状況も様々である。

では、「松石図」とは、彼にとつてどのような意味を持つ画題であったのだろうか。詩中から窺える画松のイメージに注目すると、②に「勁雪 巖霜 君試に看よ」というのは、『論語』子罕篇の「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るを知るなり」や『礼記』礼器篇の「松柏の心有るが如し(中略)、故に四時を貫きて柯を改め葉を易えることあらず」のように、松柏を高節の象徴とする見方に基づいている。彼には他にも、画について詠まれたものではないが、韓淮端公なる人物への挽歌「哭韓淮端公兼上崔中丞」(英三〇三、全三〇三)の中では、「挺生たり 巖松の姿、孤直は雪霜を陵ぐ。亭亭として清陰を結び、桃李と芳を競わず」と、松を高潔な人格の象徴として詠み込んでいる。樹木とともに描かれる石についても、⑥に挙げた「画石」から判断して、永年不変の堅貞の表れと理解してよいであろう。

従って、彼の樹石図に対する基本的なイメージは、経書にも説かれる古代以来の伝統的かつ一般的な松石観に基づいていたと言える。ただ、詩から分かるように僧侶とも画の贈答の機会が多かったことや、晩年に道教を信仰したことを考え合わせると、より広い視野からの分析も必要に思われる。この問題は、師の張璪の絵画観とも関係するため、まず師弟関係と師の張璪の絵画観から考えることとしたい。

張璪は、『歴代名画記』巻一、「論画山水樹石」では「樹石の状は「中略」、張通(張璪)に窮まる」とされ、『唐朝名画録』でも神品下に挙げられるように、唐代樹石画家として最高の評価を受けた画家である<sup>44)</sup>。生没年は不明だが、安史の乱の際に鄭虔、王維とともに賊軍に捕らわれて官を受けたため、乱後に罰せられるところであったのを、三者共に画

を善くしたことから罪を免れたと伝えられている（『新唐書』卷二〇二、鄭虔伝）。従って、安史の乱の際には、ある程度の年齢に達していたと考えられる。劉商との年齢関係を考えると、政府軍が長安を奪還した至徳二年（七五七）には、前章で推定した生年から換算して劉商は約二十歳であるから、張璪はそれよりも年長であったとみてよいであろう。張璪に教えを受けた時期は、劉商の官歴からみて、合肥令就任以前が最も可能性が高く、また合肥令を辞め汴州觀察判官となるまでの間ということもありうる。

『歴代名画記』卷一〇によれば、張璪は後年政争に巻き込まれ、衡州（湖南省衡陽）の司馬さらに忠州（重慶市忠県）の司馬へと左遷されたが、劉商がそれを悲しんで詠んだのが、次に挙げる有名な「懷張璪」（万四二、全三〇四）である。<sup>15</sup>

苔石蒼蒼臨澗水

苔石は蒼蒼として澗水に臨み

陰風裏裏動松枝

陰風は裏裏として松枝を動かす

世間唯有張通会

世間 唯張通の会する有るのみ

流向衡陽那得知

流れは衡陽に向かうも那ぞ知るを得ん

左遷については、張璪が宰相・王縉（七〇〇〜七八一）の推薦によって檢校祠部員外郎、塩鉄判官となったことから、大曆十二年（七七七）の王縉の失脚に座したとする意見もあった。しかし近年、陶敏氏は南宋・陳思『宝刻叢編』卷八、鄆県、「唐復県記」の条から、建中二年（七八一）に張璪がなお祠部員外郎であったことを指摘し、左遷が王縉の失脚とは無関係であることを示した。そして、張璪についての著名な文献である符載「江陵陸侍御宅讌集張員外画松石序」（『唐文粹』卷九七）

は、張璪を武陵郡（湖南省）司馬としており、その文の作られたのが、符載の江陵にあった貞元五、六年（七八九、七九〇）頃と考えられることから、彼の左遷もこの時期としている。<sup>16</sup>

貞元五、六年頃とすれば晩年の左遷となり、張彦遠が彼の最終官歴を衡州司馬・忠州司馬としたのも納得がいく。また、陶氏の説に従うなら、結句の「流れは衡陽（衡州）に向かうも那ぞ知るを得ん」の表現も理解しやすくなる。前章で見たように、劉商は貞元四年頃には揚州に滞在しており、衡州からは長江の下流に位置することから、揚州にあって張璪の左遷を知った劉商が、上流にいる師を思つて詠んだものと解することができる。両者の晩年にいたつての詩として、悲しみもより切実であつたと思われる。

本詩は、七言絶句であるが、苔むした谷川の石と風に揺れる松という起句と承句には、樹石画の主要な描写内容が尽くされている。松と石に水、風（氣象）を加えた四要素が、樹石画の主要なモチーフとして宋以降まで受け継がれていくことは（伝）北宋・李成「喬松平遠図」（澄懷堂美術館）、元・曹知白「双松図」（台北故宫博物院）、明・呉伯理「流水松風図」（メトロポリタン美術館）などを見ても明らかであろう。本詩は、その定型が既に中唐において画家の自覚の下に成立していたことを示すものと位置づけられる。劉商は「世間でその境地を理解できるものは、ただ張璪のみ」と述べている。その画境とは、いったい如何なるものであつたらうか。文献に残された張璪自身の言葉や、彼に対する同時代の画評から考えてみたい。

『歴代名画記』卷一〇、張璪条には、彼が秃筆や或は直接手で描いたと伝えられ、先輩の樹石画家の畢宏が見て驚き、誰に学んだかを尋ねたところ、「外は造化を師とし、中は心源に得たり」と答えたので、畢宏

は以後筆を取るのを止めたという逸話を載せる。

「造化」は、『莊子』大宗師篇、『列子』周穆王篇、湯問篇など道家の文献に端を発し、万物を生み出す働きを意味する。特に『列子』湯問篇は、周の穆王のもとに偃子という細工師がやってきて、内臓に至るまで人間にそっくりに作られた歌い踊る人形を披露したので、王は「造化者と功を同じくす可きか」と感心した。当時、細工を善くした班輸、墨翟は、自らの腕前が最高であると思っていたが、偃子の腕前を聞き、以後は自慢せず、たまに道具を取るに過ぎなくなつたという。単に「造化」の用語のみならず、張璪と畢宏の逸話自体の背景となつていられるように思われる。

『歴代名画記』によれば、張璪には自らの絵画観を著した『絵境』という書物があつたといひ、この逸話はその直後に記されているので、『絵境』の記述に基づいた可能性もある。言葉一つではあるが、張璪が作画において、道家思想に説かれる造化の働きを意識していたことを窺わせよう。

そのことは、符載が記した「江陵陸侍御宅讌集張員外画松石序」<sup>(47)</sup>からも窺える。江陵（湖北省）の陸澧という人物の邸宅において開かれた宴の席で、張璪が松石図を描いた様子を記したものであるが、長文であるので、まず彼の作画の状況を語る部分を抜き出して紹介する。

公（張璪）天縦の思、歛<sup>ひ</sup>ち詰<sup>め</sup>る所有り。暴かに霜素を請い、奇蹤を搗<sup>た</sup>うを願う。主人、奮裾、嗚呼し、相和す。是の時、座客、声聞の士、凡そ二十四人、其の左右に在りて、皆岑立し、注視して之を觀る。員外、中に居り、箕坐し氣を鼓し、神機始めて発つ。其の人を駭<sup>おど</sup>かすや、流電の空に激し、驚颯の天に戻るが若し。摧挫斡掣、

擗<sup>つか</sup>霍瞥列、毫飛び墨噴し、掣<sup>つか</sup>める掌は裂くるが如く、離合倘恍、忽ち怪状を生ず。其の終わるに及ぶや、則ち松は鱗皴、石は巉巖、水は湛湛、雲は窈眇たり。筆を投じて起ち、之が為に四顧すれば、雷雨の澄霽して、万物の情性を見るが若し。

画を描くに当たつて張璪は、「箕坐（両脚を投げ出して座る坐法）し、氣を鼓し、神機始めて発つ」というように、造化の働きに自らの精神を重ねようとして見えるように見える。「神機」は『淮南子』齊俗訓に見えるように、靈妙な働きの意であるが、ここではそれを得るために、箕坐という礼儀に反した座法（『礼記』、曲礼上）で、臨んでいる点が重要である。このような態度は、『莊子』田子方篇にある古代の絵画観を示す有名な故事、宋の元君が図を画かせようと画工を集めた際、多くの画工は皆きちんと用意を整えていたが、一人だけのんびりと遅れてやってきて、準備もそこそこに宿舎に帰り、衣を脱いで般礴（箕坐）していた者があり、元君はこれこそ真の画家であると感心したという話を想起させる。

その制作の様は、「流電の空に激し、驚颯の天に戻るが若し」というように、筆墨を縦横無尽に駆使したすさまじいものであつた。そのため同時代の潑墨画家との類似や相違について議論があるが、この問題についてはひとまず措く。本稿の論点で注目されるのは、画が完成した際の「筆を投じて起ち、之が為に四顧す」という様で、これもまた『莊子』の養生主篇に語られる、有名な庖丁の故事を踏まえている。牛をさばく名人である庖丁が、得道の刀さばきによって解体を終え、心中満足した様子「刀を提げて立ち、之が為に四顧す」を踏まえ、張璪の画技のすばらしさを暗示している。

さらに符載は、道家の思想を踏まえ、次のように賞賛する。

夫の張公の芸を觀れば、画に非ざるなり。真道なり。其の事有るに當つては、已に知は夫れ機巧を遺て去り、意は玄化に冥す。而して物は靈府に在りて、耳目に在らず。故に心に得、手に応ず。孤姿絶状、毫に触れて出づ。氣は沖漠に交わり、神と徒となる。

張璪の画を「真道」と評しており、「知は夫れ機巧を遺て去り、意は玄化に冥す。而して物は靈府に在りて、耳目に在らず」というありさまも、人間の後天的な知識や技術を捨てて、自然の理法に帰ることを善しとする老莊的な態度である。「故に心に得、手に応ず」という批評も、『莊子』天道篇の、車大工が齊の桓公に、車輪造りのこつは「之を手に得て心に応ずる」ものであり、口では説明できないと説いたことを踏まえていよう。

唐代は、儒仏道の三教鼎立の時代であるとされ、実際、唐代士大夫の思想状況についての近年の研究では、彼らが儒教に限らず、仏教、道教（道家思想を含む）にも関心を示しており、三教の交流が活発に行われていた状況が明らかにされつつある。<sup>48</sup> 絵画思想に関しても、例えば『歴代名画記』には、道家の思考法、価値観が多く取り入れられている。<sup>49</sup> このような唐代の士大夫の思想状況を踏まえてみると、張璪の作画が道家思想に影響を受けていたことは、むしろ自然と言えよう。<sup>50</sup>

さて、張璪に道家思想の影響が想定され、弟子の劉商も晩年は道教に傾倒したことを考え合わせると、彼らの松石図を先述の経書における松柏のイメージから理解するだけでは不十分なように思われる。

この点で注目されるのは、老莊思想が盛んであった六朝文学の中に、

松柏を貞心の象徴と見、それにあやかつて自らの精神を高潔に保ち、隠遁して神仙の世界に遊びたいという願望が見られることである。

西晋・何劭（字・敬祖）の「遊仙詩」<sup>51</sup>（『文選』卷二一）は、前半において「青青たる陵上の松、亭亭たる高山の柏。光色は冬夏に茂げり、根柢は彫落すること無し。吉士 貞心を懐き、物に悟りて遠く託せんことを思う。志を玄雲の際に揚げ、目を流して巖石を囓る」と詠う。岡の上の青々とした松や、高い山に聳える柏の年中茂れる様を見て、吉士（われ）は、正しい心を抱いて、それらの物（松柏）を見て悟り、身をそれらに寄せてみたいと思う。志を高く雲間に馳せ、あるいは目を移して岩石を見るところである。

後半部では「長く懐いて仙類を慕い、眇然として心は懸遼たり」と言い、神仙との交わりを結びたいと願望を述べる。松柏に感銘を受け、また雲や岩に思いを寄せるとするのは、先述の「懷張璪」において指摘した、松石図の基本的な要素とも共通する。「懷張璪」詩において、「水辺の青々と苔むした岩、風にそよぐ松の心が分かるのは世間で唯張璪のみ」と劉商が詠ったその心中には、高節に加えて、「遊仙詩」に詠われるような貞心や神仙世界への憧れがあったのではなからうか。<sup>52</sup>

松石図というと、高節のイメージから、儒教的な方向へ注意が向きがちにも思うが、唐代の士大夫は、道家思想、道教にも関心を示しており樹石画についても、そのような面にも注意を払う必要がある。<sup>53</sup>

なお本章の終わりに、上述の議論のほかに題画詩から読み取れる内容について触れておきたい。現存する劉商の題画詩は、いずれも七言絶句の簡潔な内容で、彼の絵画観を示すような積極的議論や主張は認めがたい。むしろその詩は、状況に応じて飄々と気負いなく詠まれているように見え、士人、僧侶、隠者など様々な階層、身分の人々に対して気さく

に作画しているように見える。<sup>(51)</sup>

そこから考えるに、彼の画風は、張璪の秃筆や手を直接用いることで奔放さを強調する画風に比べ、より穏やかで親しみやすいものではなかったかと推察される。『歴代名画記』の劉商条は、「初め張璪を師とし、後には自ら真に造るを意と為す」として、彼が師の風にとどまることなく、自らの画境を開こうとしたことを伝える。又、同書の「山水樹石を画くことを論ず」では、劉商の特徴を「取象」と評する。それらから判断すれば、モチーフ本来の持つ形態や性質を素直に描き出す方向に、彼の樹石画の特徴があったのではないだろうか。

#### 四 晩年の隱遁と道教信仰

先に述べたように劉商は晩年、病をもって官を辞し、江南へ移った。そして、道教に傾倒し、ついには家族とも別れて山中に隱遁し、余生を送っている。知人、家族に別れを告げた「移居深山」（万四二、全三〇四）、「帰山留別子姪二首」（万四二、全三〇四）があり、武元衡の序も「晩歳に塵滓を擺落し、親愛を割棄して、靈仙の境に夢寐し、玄牝の門に逍遙す。又安ぞ雲霓を攀附し、巖壑を蛻迹し、超然として懸解し、漫汗と無間に遊ばざるを知らんや」と述べる。劉商の山中への隱遁は、やがて仙人になったとする伝説を生み、五代に作られた南唐・沈汾『続仙伝』（第二章、文献③）、前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』（文献④）に伝が載せられることとなった。両者とも仙伝という書物の性格上、記述には空想的で非現実的な部分も多く、しかも内容は互いに大きく異なっているが、劉商の晩年の事跡を考える上で重要な点も多い。そこで、これらの内容分析を起点として、晩年の活動を探ってみる。

はじめに、経歴などの情報がより具体的な『続仙伝』から見てみたい。<sup>(52)</sup> 長文のため、話の展開が見やすいように抄訳する。

劉商は、彭城の人。長安に住んだ。若くして文学に秀で、「胡笳十八拍」が世に行われた。進士に挙げられ、郎中に上った。生来道術を好み、道士に会えば師事し、鍊丹服氣いずれも熱心に修行した。時のたつ速さを嘆き、肉体の衰えの前には出世は無用と考えるようになった。幸い子供たちの婚姻も済んだことから、病を理由に官を辞め、道士となって東遊した。

広陵（江蘇省揚州）の市で薬を売っていた道士と出会い、その誘いを受けて酒樓で飲んだ。道士は秦漢からの出来事をまるで見てきたかのように知っており、劉商は只者ではないと感じて教えを請うたが、道士は神仙の術は得ることはできないと答えた。暮れになって帰ろうと樓を降りると、道士は忽然と姿を消した。

劉商は翌日再び城街へ道士をたずねてみた。道士はまた薬を売っており、劉商を見ると喜んでまた酒樓へ連れて行った。歎談し酒が進むと、小さな薬囊を一つ取り出して劉商に贈った。そして戯に詩を吟じた。「無事揚州に到り、相携さえて酒樓に上る。薬囊贈別と為す、千載更に何をか求めん」と。暮になって別れた。その後、何度も尋ねていったが、道士に会うことはなかった。

囊を開けてみたところ、紙に包まれて一つの瓢箪があり、九粒の薬が入っていた。麻粟のようなものである。道士の詩に従って之を飲んでみると、にわかには精神が爽やかになり、飢えを感じず身も軽くなった。長江を渡ってしばらくの間茅山（江蘇省句容）に遊び、宜興（江蘇省）の張公洞との間を往復し、その壺画溪の景を愛して、



遂に近隣の胡父渚に閑居し、山中に隠れた。近所の樵が出会ったところ、「我は劉郎中なり」と言ったという。終わるところを知らず。地仙となったものであろう。

まず冒頭の出身や官歴、退隠して広陵に移ったことなどは、先にも確認してきたように、史実に基づいている。広陵にきてからが神仙譚的な内容になり、市で薬を売る道士から仙薬を授けられ、不死の身となったとする。市に仙人らしき異人が出没し靈験を示すというパターンは、『列仙伝』、『神仙伝』などの先行する神仙伝にも多く見られる。注目されるのはその後の経歴で、道教の一大聖地である茅山に遊び、宜興の張公洞とを往復し、罨画溪の景を愛して、遂に胡父渚に閑居し山中に隠れたと甚だ具体的に記述している。張公洞は、後述のように洞天福地説による道教の福地の一つとされる大洞窟で、罨画溪、胡父渚はその付近の地名である。

次に『仙伝拾遺』について検討する。これも、長文のため抄訳する。

劉商は中山靖王（劉勝）の後裔で、孝廉に挙げられ合淝（肥）令となった。しかし道に傾倒し、方術鍊丹を学んだ。人の鍊丹に効のないものがあると、必ず薬の素材や炉を与えてやった。退隠し、茗溪・雪溪（浙江省）に舟を浮かべ、遂に武康（浙江省）上強山の麓に卜居した。樵童や薬売りの老人が薬草を売りに来ること常であったが、いつも良い値で買ってやった。

ある日、樵がやって来たので一束の朮（仙薬ともされる薬草の一種）を良い値で買ってやった。この時既に薬草は軒下や垣根に山と積まれる程であった。それから田野へ散策に出かけたところ、林の

中から話しかける者があり、言うことには「中山劉商は、今日已に真朮を賜った。蓋し陰功の甚だ厚かったところに（天が）感じたためであろう」と。林の中を窺ってみたが、もう人影はなかった。

急いで帰って朮を服用してみたところ、一月ばかりして歯と髪が若返り、容貌も子供のようになった。馬の走るような速さで歩け、高い峰も疲れずに登れるようになった。さらに一月ばかりすると座っていても四方のことが知れるようになった。符契を試せば、上壘洞中の世界と通じることができるようになった。

ある酒家が、樵たちとは異なることを悟って、礼を尽くして劉商に接したところ、月を重ねてまた訪れ、酒屋に言うことには「我は中山劉商である。夙に水墨を学ぶ。願わくは一函を止めて、厚情に報いたい。画絹を用意しておくように」と言って、再来を約束した。ある日、果たして酒家を訪れ、筆をとって思いを運らせ、一刻ほどの間に千山萬水を描いたが、世の画工の及ぶところではなかった。去ろうとして酒家に言うには「我が祖の淮南王（劉安）が、九海総司となつて列仙の任に就いている。私を南溟都水の役につけようとしている。十日ばかりしたら遠くへ行くので、もう来ることはない」と。このようなことがあつて十日ばかり、空が晴れ渡って香風瑞雲が山に満ちた。劉商が馬に乗って空中を南へ飛び去っていくのを、樵が見たということだ。

本伝では、劉商を前漢の中山靖王・劉勝（？前一一三、『漢書』卷五三）の子孫と述べているが、第二章で見てきたように彼の本貫は彭城であり明らかな付会である。合肥令となったことを記すのは、史実に合うが、最終官歴とすべき郎中への言及はない。

退隱の場所についても、『統仙伝』とは異なり、苕溪・霅溪を経て、武康の上強山麓に居を定めたとする。苕溪と霅溪は、天目山に発し湖州で合流して太湖へ注ぐ二川であるが、上強山については、詳しいことは知られず、この武康隱遁説には訛伝の可能性もある<sup>(61)</sup>。いずれにしても、第三章で挙げた題画詩「袁徳師求画松」において述べたように、貞元年間宜興の尉及び常州軍事判官となった袁徳師が、劉商に画を求めていることから、劉商が居したのは『統仙伝』の言う宜興とすべきである。

劉商が仙人になることができたのは、人の鍊丹を助け、薬種を良い値で買ってやるといった善行を積んだためとされている。仙人になるには善行を積むことが必要であるとする思想は、既に『抱朴子』内篇の対俗、微旨に見えるが、本伝ではそのような既存の信仰の枠に止まらず、画家としての面を踏まえて、絵画に関する逸話を展開させている点が注目される。親切的な酒屋へのお礼に作画を行うという筋書きは、第三章で見た題画詩「山翁持酒相訪以画松酬之」との関連を思わせる。ただし、ここで描いているのは樹石画ではなく「千山萬水」というように山水画である。この説話が山水画の隆盛をむかえる唐末五代頃に成立したことを示唆しているであろう。

さらに、最後の部分では淮南王・劉安（？）前一二二、『漢書』卷四四）までが祖とされ、その計らいで南溟都水の役につくために、空中を馬に乗って去ったという多分に創作的な結末となっており、地仙になったとの言及に止める『統仙伝』に比べても、伝説としての脚色的な要素が強い<sup>(62)</sup>。

以上、両伝の内容を検討した結果、『統仙伝』の方が、『仙伝拾遺』よりも経歴について、より事実を踏まえているとの見通しを得た。そこで、次に『統仙伝』に記される晩年の劉商の行動が、当時の道教の状況

からみてどのような意味を持つているのかを考えてみる。

周知のように、唐王朝は、道教の教祖・太上老君（老子）と同じ李姓であることから、これを自らの祖とし、崇道政策をとったために道教が栄えた。特に玄宗（在位七一二～七五六）は熱心に信仰したことで知られ、劉商がその時期に青年期を過ごしたことは重要である。

『統仙伝』が、劉商の滞在地の一つとする茅山は、晋代以来の茅山派（上清派）の本拠地である。同派は、第一二代宗師の司馬承禎（六四七～七三五）、第三代宗師の李含光（六八三～七六九）、「神仙可学論」で知られる呉筠（？～七七八）といった道士が玄宗の信任を得、当時最も盛んであった。劉商が同山において正式に道士となったのかは明らかでないが、茅山派の思想の中で彼の事跡との結びつきが指摘されるものに、司馬承禎『天地官府圖』（『雲笈七籤』卷二七）に説かれる「洞天福地説」がある。

これは、それまでも道教の聖地とされていた名山や洞窟を、十大洞天、三十六小洞天、七十二福地に分類し、所在地やそれを統治する神仙の名を挙げたもので、劉商が隱遁した宜興の張公洞は、七十二福地のうち第五九番目に当たっている<sup>(63)</sup>。茅山からも比較的近く、彼にとっては訪れやすい聖地であったのだろう。

中国には洞窟の内部に仙境があるという伝説があり、各地の洞窟は地中で互いに通じていると考えられていた。洞は劉商の詩においてもしばしば仙境として詠まれており、信仰のよりどころとしていたことが窺える。「題潘師房」<sup>(64)</sup>（万四一、全三〇四）では、「水を渡り 山に傍うて絶壁を尋ね、白雲飛ぶ処 洞門開く。仙人来往して行くに跡無し、石径の春風 緑苔を長ず」と、洞窟には仙人が往来するという考え方が示されている。

ここで注目されるのは、彼の詩に自ら分け入った山や洞窟を、桃源郷のイメージで捉えたものがある点である。「袁十五遠訪山門」(万四二、全三〇四)では、「僻居 道を謀って身を謀らず、病を桃源に避けて秦を避けず」とあり、自分が山中にこもったのを、桃源郷に病を避けたのだと称している。

桃源郷は、東晋の陶淵明の「桃花源記」に語られる、武陵(湖南省)の漁師が谷川を登っていったところ桃花の林に至り、その先の洞窟をくぐってたどりついたとされる楽園である。「題水洞二首」(万四二、全三〇四)第一首では、山中の溪流が洞窟内に流れ込んでいることを題材に取り、「桃花流出す 武陵の洞、夢想す 仙家雲樹の春。今看る水の洞中に入り去るを、却つて是れ桃花源裏の人」と詠う。武陵では桃花が洞から人界へ流れ出ていたから、今その逆に水が洞窟の中に流れ込んでいく側にいる自分は、桃源郷にいる仙人ではないかと言うのである。第二首では「長く看る 巖穴より泉の流れ出るを、忽ち聴く 懸泉の洞に入るの聲。山花を摘んで水上に抛つこと莫かれ、花浮んで洞より出て世人を驚かさん」と、花を摘んで流れの中に放つてはいけない。花が洞を出ていつて浮かんたら世人を驚かせてしまうからと詠っている。

このように、劉商には自己の隠遁の地である張公洞を桃源郷と結び付けようとする考えがあった。確かに洞天説では各地の洞窟内の仙境は地中でつながっていると考えるが、桃花源のある武陵と劉商の隠遁した宜興とは、地理的に大きな隔たりがあり実感に乏しい。では、なぜ敢えて自らの隠棲地を桃源郷に擬したのであろうか。

その背景として注目される出来事が、当時の茅山派をめぐる信仰の中に生じていた。道士・瞿柏庭が、武陵の桃源において昇仙したという、当時非常に著名であった神仙譚である。

これは、茅山派第一五代の宗師となる黄洞元が、まだ朗州武陵の桃源桃花観に在った際、弟子の瞿柏庭が洞中に入って神仙に遭遇し、その後、大暦八年(七七三)五月二七日に衆人が見守る中、姿を消して仙化したというものである。この事件については、砂山稔氏の專論があり、当時の士大夫に与えた影響の大きさについても分析がなされている。符載「黄仙師瞿童記」(『文苑英華』卷八二二)、劉禹錫「遊桃源一百韻」詩(『劉夢得文集』卷一)、温造「瞿童述」(『全唐文』卷七三〇)などの記述や詩が作られ、貞元七年(七九一)には吉州刺史であった闍黎が、官を辞して、桃源桃花観へ入道するというような事態も起こっている。

瞿柏庭の師の黄洞元は、その後、貞元五年(七八九)には茅山へ移り、第一五代の宗師の座についた。劉商が揚州から宜興へ移ったのは、第二章で述べたところから、貞元四年以降のことと考えられ、従って茅山を経た時期は黄洞元の宗師就任とほぼ重なる。ただでさえ世間に知れ渡った事件であり、しかも新たに就任した宗師に関するでき事であれば、劉商も瞿柏庭登仙の噂を耳にしていたはずである。

劉商が洞天福地の一つ張公洞付近に隠遁の地を定め、それを桃源郷に見立てたのには、桃源郷の舞台である武陵の洞窟で起こった瞿柏庭の神仙譚に感化を受けたことも一因ではなかったかと推察される。

同時代の神仙譚に関する劉商の詩には、他にも「謝自然却還旧居」(万四二、全三〇四)がある。

これは、貞元十年(七九四)に、果州(四川省)の金泉山において、女道士・謝自然が白日昇天したという神仙譚を題材としたものである。謝自然の昇仙は、同地の刺史であった李堅が上奏し、また「東極真人伝」(『新唐書』卷五九、芸文三)を作ったことで、人士の間にも広まった。韓愈(七六八〜八二四)が長詩「謝自然詩」(『朱文公校昌黎先生文集』

卷一)を作っているほか、中唐の施肩吾、晩唐の李翔によっても詩がつけられている。<sup>(75)</sup>

劉商詩は「仙侶の招邀は自ら期有り、九天の升降 五雲隨う。知らず虚皇を辞して罷むの日、更に人間に向かいて幾時か住するを」というもので、謝自然が白日昇天の三箇月後に再び人間界に下つてきて李堅に天上界の様子を告げ、再び昇天したという後日談を踏まえている。<sup>(76)</sup>

瞿柏庭、謝自然の昇天とその噂に対する士人たちの反応の大きさは、そのような神仙譚が、同時代の士人たちの信仰の支えとなっていたことを裏付けており、このことから、劉商の信仰や山中への隠遁には、瞿柏庭・謝自然のような当時流布していた神仙譚の影響があつたと考えられる。

道教における重要な修行に、仙薬の製造、服用がある。『仙伝拾遺』、『唐才子伝』でも劉商が錬丹を行ったことを言うが、実際に薬を錬ったかは詩文には明確でない。「酬澹上人采葉見寄」(万一五、全三〇四)に見られる「靈芝」、「寄李備」(万四二、全三〇四)に見られる「松花」のように薬について言及する詩もあるが、いずれも植物性のものである。<sup>(78)</sup>

むしろ、隠遁後の詩には、修行に関するものよりも、山中における自適の生活を詠ったものが多い。「送王永二首」<sup>(79)</sup>(万四二、全三〇四)は、第一首が『三体詩』にも取られており、彼の詩の中でも著名なものの一つである。王永なる人物との送別に際しての詩で、内容から、山中に移居後の作かと考えられる。

第一首では「君去らば 春山 誰と共にか游ばん、鳥啼き 花落ちて 水空しく流れん。如今 別を送つて溪水に臨む、他日 相思わば 水頭に来たれ」として、春山の楽しみを共に分かちあう君が去つては、鳥

も悲しく鳴き、花は落ち、水も空しく流れるだけと詠う。ついで第二首では「綿衣は熱きに似て 袂衣は寒し、時景 和なりと雖も 春已に闌なり。誠に暫く別るるを知る 那ぞ惆悵せん、明日よりは藤花 独り自ら看ん」と、友の去つた後、明日からは藤花は独りで見ることしようと言う。<sup>(80)</sup>

山水の楽しみを理解する友は、他にもいたらしい。「合谿水漲寄敬山人」<sup>(81)</sup>(万四二、全三〇四)には、「共に碧谿を愛して水に臨んで住み、相思うて来往 莓苔を踐む。而今却つて谿水を嫌わんと欲す、雨は春流を漲らせて往來を隔つ」と、谷川の流れを愛して、溪水に沿って住む兩人が、春の増水で会うことができない皮肉を語っている。

『送王永二首』には「藤花」などの花が、山中の楽しみの一つとして取り上げられていたが、他にも花について触れた詩が散見される。「不羨花」<sup>(82)</sup>(万四二、全三〇四)では、「惆悵す 朝陽の午又斜なるを、剩え桃李を栽えて仙家を学ぶ。花開き花落ちて人旧の如し、誰道う容顔は花に及ばず」として、花の衰えることの早さを詠い、「山中寄元二侍御二首」<sup>(83)</sup>(万四二、全三〇四)の第一首では、「心に汗漫を期して雲扃に臥す、家計漂零す 水上の萍。桃李秋に向かいて彫落し尽き、一枝の松色独り青青」と述べる。春は花に心をよせ、冬には松を友とし、たまには山人や僧侶、士人とも往來して清談する、そうして心静かに生きるのが、晩年の旨とするところであつたのだろう。

一般に道教というと、呪術的な面での現世利益や丹薬の服用による長生といった現代からすれば迷信に属する部分が注目されがちであるが、既に南朝系の道教では士人の修養として、節制や他者への善行の必要が説かれており、精神を高潔に保つことを仙人となるべき基本条件と説いている。唐代にはこのような考え方がさらに強まり、劉商よりやや前の

茅山派では、司馬承禎の『坐忘論』、呉筠の『神仙可學論』など、丹藥の服用よりも精神面の修養を重んじる理論も出されている。<sup>84</sup>このような道教に説かれる精神修養的な面も、劉商の隱遁の背景を考える上では、留意すべきであろう。

以上、彼の隱遁と信仰について分析してきたが、名門出身で詩や画にも名高い貴人が、老年に至って敢えて山中にこもったという事実は、劉商本人が「山中寄元二侍御二首」の第二首において「紫を拖き<sup>ひ</sup>金を鏘<sup>な</sup>らす 濟世の才、知る 君が玉に倚って三台を望むを。深山窮谷 人の到る無し、唯だ狂愚のみ有って独り自ら来る」というように、当時の人々からみても、驚きに値するものであったに違いない。そのことを、当時の道教徒の視点から考えた場合、もともと道士、女道士であった瞿柏庭、謝自然の昇天とはまた別の重さをもった神仙譚として、吹聴するに足るものだったと言えよう。

彼が仙人となったという伝説が、中晩唐から五代にかけて、変容しつつ流布していったことは、『統仙伝』と『仙伝拾遺』の二書に見てきたところからも明らかである。結局、同時代の神仙譚に影響を受けた劉商の信仰は、次の信仰を生み出すための神仙譚として語り伝えられることになったのである。

### おわりに

本稿では劉商の生涯を、詩人、画家、道士という三つの視点から論じてきた。彼が生きたのは安史の乱後の、政情が不安定で戦乱が断続的に起こった時期であった。合肥令を務めた後、汴州觀察判官となったが、この際、李勉の幕府に入った可能性が高いことを彼の詩から確認した。

幕下では従軍の機会が多く、自らの能力を発揮する場は多くなかったとみられ、結果的には持病もあって江南へ退隱し、遂には神仙に憧れて山中に入った。

詩の内容については、この時期の多くの詩人がそうであったように、盛唐の雄大な気風といったものは見受けられず、世の中を自分の力で変革しようという志や意欲は希薄である。自らの周囲の人物や事柄に心を通わせ、繊細でいとおしむような感覚が強い。

絵画に関しては、題画詩の解釈を試みるとともに、張璪との師弟関係に注目し、彼らの絵画観や樹石画に対するイメージを考察した。その結果、張璪の作画に道家思想の影響を指摘し、彼らの松石図には、経書に説かれるような高節のイメージに加え、貞心や神仙世界への憧れがあったのではないかと推察した。

また、道教への信仰面では、同時代の洞天福地説や神仙譚に影響を受けたことを論じた。晩年になって実際に山中へ入ったところが注目を集め、地仙として喧伝されるに至ったのである。

最後に、その後の絵画史における劉商の位置について述べておきたい。唐以後の画史類を見るに、彼の画名は師の張璪の影に隠れてしまった感がある。同時代の韋偃が、その画松を杜甫に詠われたような、後世に高名となった詩人との交流がなかったことも不運であったように思う。

劉商の作品と伝えられたものは、後世の著録類を見ても「胡笳十八拍図」など極めてわずかである。<sup>85</sup>その中で、彼の「觀弈図」を李公麟が模したとされる作品が伝来していたことが元以降の詩文に散見される。<sup>86</sup>「觀弈」は、神仙とも関係の深い画題であり、ふさわしい伝称と思える。後世の画史において彼は格別注目された存在ではないが、にもかかわらず、彼の経歴を踏まえた伝称を与えるところに中国絵画史の伝統の強固さを

見る思いがする。ただ、試みに彼の生涯をたどった立場からすれば、本来、得意とした樹石画ではない点は、いささか皮肉の感を禁じ得ない。

今回、一人の画家の伝記を取り上げ分析を行った。専門外の分野も扱わざるを得ず、不十分な点が多々あると自覚している。けれども、作品も伝わらず画史類にもわずかな記録しか残らない画家でも、視野を広げることによって、人間としての全体像が見えてきたことは収穫だったと思う。今回の考察を、今後の唐代樹石画の総合的な考察へとつなげていきたい。

註

(1) 樹石画についての先行研究としては、主に次の論文を参照。

小林太市郎「唐代の画松」(『中国絵画史論叢』一九四七年)。

宗像清彦「中国における樹石画の発生とその意義」(『哲学』第五三集、三田哲学会、一九六八年)。

山岡泰造「水墨画の成立と山水樹石画」(『哲学』六号、関西大学哲学会、一九七五年)。

古田真一「中唐に於ける樹石画の展開について」(『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』二九号、一九八五年)。

(2) 中唐の樹石画流行について、長廣敏雄氏は「盛唐の豪壮華麗なるもの、そして権威的な壮大なものから身を退いて、画家がはじめて自己自身にかえり始めた」とされる。

同氏訳注『歴代名画記 一』(平凡社・東洋文庫三〇五、一九七七年)、八七頁。

このような大きな視野からの見解についても、個々の資料の分析を重ねることで、具体的な状況を明らかにすべき時期にきていると思う。本稿はそのような作業の一環としての意味も持つ。

(3) 武元衡「劉商郎中集序」(『文苑英華』卷七二二)

天運地転、剛柔生焉。礼弁楽形、文章出焉。天之文莫麗乎日月、地之文莫秀乎山川。聖人觀象立言、用稽述作。發乎情性、形於味「咏か

歌。大則明天下政途、弥綸土化、爾小則又舒一時幽憤、刺見国風。故

子夏云、在心為志、發言為詩。声成文謂之音也、固可動天地、感鬼神、則正始之道存焉。有唐文士彭城劉公諱商字子夏、眷予一先後之輩、睦予兩中外之親、緣情所鍾、愛亦加等。顧惟遭幸、秉國樞重、變贊台衡之務、統臨井絡之人。其孤乃緘鑄遺文、提捧万里、猥期序引、將佐詞林。予感悼故知、側覽華藻。珠玉綴錯、清冷自飄。皆素所狎聞也。泫然涕下、不能自収。矧公遐情浩然、酷尚山水。著文之外、妙極丹青。好事君子、或持冰素、越淮湖、求一松一石、片雲孤鶴。獲者宝之、雖楚璧南金、不之過也。晚歲擺落塵滓、割弃親愛、夢寐靈仙之境、逍遙玄牝之門。又安知不攀附雲霓、蛻迹巖壑、超然懸解、与漫汗游乎無間邪。著歌行等篇、皆思入苜冥、勢合飛動。滋液瓊環之朗潤、瀆發綺綉之濃華、解疑作觸境成文、隨文變象。是謂折繁音於孤韻、貫清

濟於洪流者也。今所編錄凡二百七十七篇。及早歲著胡笳十八拍、出入沙塞之勤、崎嶇驚畏之患、亦云至矣。有若太原王緒、河東裴茂、茂弟篤、河南豆盧峯、馮翊嚴紳、紳弟綬及余伯舅泊于子夏、咸以儒業相資、冠冑群族。雄詞麗句、遍在人間。予与司空敞公、親結義深、相与編葺、恨不得繼采詩之末、播于樂章。且伝諸名士、庶幾不朽。忝以宿姻旧好、撫事追書、故言之不讓也。(中華書局用宋刊本影印用刊本影補本、以下引用同本。「」内引用者、以下同)

(4) 『全唐詩』の卷数表記法は、康熙四十六年(一七〇七)の揚州詩局原刊本、光緒一三年(一八八七)の上海同文書局影印本、一九六〇年の北京中華書局排印本で、それぞれ異なるが、本稿では現在通行している中華書局本の卷数を用いることとする。なお「胡笳十八拍」は卷二三、琴曲歌辭にも収録されている。

また、陳尚君輯『全唐詩統拾』(同氏輯校『全唐詩補編』中、中華書局、一九九二年)卷一八も残句一件を収録する。

(5) 『全唐詩』の底本や編纂の経過については、『全唐詩稿本』に収録の次の論考が詳しい。

劉兆祐「御定全唐詩与錢謙益季振宜通輯唐詩稿本關係探微」写在「全唐詩稿本」影印本前面。

(6) 『万首唐人絶句』には以前より知られていた万曆刊本のほかに、より刊行年代が古く、当初の姿に近い嘉靖刊本(一九五五年に北京・文学古籍刊行社より影印)がある。『唐詩』の劉商詩に使用されているのは嘉靖本で

あり、七言絶句の卷四二と五言絶句の卷十五の部分に当たる。なお、『唐詩』劉商詩の五言絶句の冒頭におかれる「怨婦」は『万首唐人絶句』には未収録で、他本を参照し筆写している。続く第二首の「緑珠怨」から第四首の「哭蕭綸」までは、『万首唐人絶句』では五言絶句の部分の末尾に配列されるが、『唐詩』では編集貼り付けの際、版心の位置の関係で本来の第一首目である「送従弟赴上都」の右側に生じた余白に貼り込まれたため、順序に異同が生じることとなった。『全唐詩』はこの『唐詩』の順序をそのまま踏襲している。

また、『万首唐人絶句』に訓註を施した次の文献があり、書き下しなどの点で示唆を受けた。

太刀掛呂山訓註『万首唐人絶句』全五卷（書芸界、一九七九年）。

(7) この問題に関しては、差し当たり『四庫全書総目提要』卷一八七、集部、総集類二における同書についての記述を参照。

(8) 平岡武夫編『唐代の詩篇』全二冊（京都大学人文科学研究所、一九六四、一九六五年）は、『全唐詩』収録の全作品について、他によるべき善本を挙げた唐代研究に必須の書であり、筆者も日頃からその恩恵にあずかっている。ただし、劉商詩に関しては、『文苑英華』などを挙げる一方で、『万首唐人絶句』は「古意」一首においてのみ挙げられ、それ以外では取り上げられていない。理由は不明であるが、参考までに注記しておく。

(9) その他、前蜀・韋穀輯『才調集』卷九に一首、北宋・王安石輯と伝えられる『唐百家詩選』卷一一に九首、南宋・計有功『唐詩紀事』（一二世紀後半）卷三二に六首、南宋・周弼輯『三体詩』（一二五〇年）に三首が採録されている。

(10) 『万首唐人絶句』に未収の五言絶句「怨婦」一首を録するのは、『唐詩』、『全唐詩』をのぞけば本書のみであることも注目される。

(11) 『唐朝名画録』能品上、劉商条

劉商官為郎中。愛画松石、樹木、格性高邁。時有畢庶子亦善画松樹、水石。時人云、劉郎中松樹孤標、畢庶子松根絕妙。（画品叢書本）

『歴代名画記』卷一〇、劉商条

劉商、官至檢校礼部郎中、汴州觀察判官。少年有篇詠高情。工画山水樹石、初師於張瓌、後自造真為意。自張貶竄後、嘗惆悵、賦詩曰、苔石蒼蒼臨澗水、溪風裊裊動松枝。世間惟有張通會、流向衡陽那得知。

或云、商後得道。

〔統仙伝〕劉商条（『太平広記』卷四六）

（画史叢書本）

劉商、彭城人也。家於長安。少好學強記、精思攻文。有胡笳十八拍、盛行於世、兒童婦女、咸悉誦之。進士擢第、歷台省為郎。性耽道術、逢道士即師資之、鍊丹服氣、靡不勤切。每歎光陰甚促、筋骸漸衰、朝馳暮止、但自勞苦、浮榮世官、何益於己。古賢皆隱官以求道、多得度世。幸畢婚嫁、不為俗累、豈劣於許遠遊哉。由是以病免官、道服東遊。入広陵、於城街逢一道士、方壳葉、聚衆極多、所壳葉、人言頗有靈効。衆中見商、目之相異、乃罷葉、携手登樓、以酒為勸。道士所談、自秦漢歷代事、皆如日觀。商驚異、師敬之、復言神仙道術不可得也。及暮、商歸僑止、道士下樓、閃然不見、商益訝之。商翌日、又於城街訪之、道士仍壳葉。見商愈喜、復挈上酒樓。劇談勸醉、出一小葉囊贈商、並戲吟曰、無事到揚州、相携上酒樓、葉囊為贈別、千載更何求。商記其吟、暮乃別去。後商累尋之、不復見也。乃開囊視、重紙裏一葫蘆子、得九粒葉、如麻粟。依道士口訣吞之、頓覺神爽不饑、身輕醒然。過江遊茅山、久之、復往宜興張公洞、當遊之時、愛罨画溪之景。遂於胡父渚葺居、隱於山中。近樵者猶見之、曰、我劉郎中也。而莫知所止、已為地仙矣出統仙伝。（中華書局排印本）

〔仙伝拾遺〕劉商条（『太平広記』卷六）

劉商者、中山靖王之後。举孝廉、歷官合淝令。而篤好無為清簡之道、方術服鍊之門。五金八石、所難致者、必力而求之。人有方術、未合鍊施效者、必資其藥石、給其鑪鼎、助使成之、未嘗有所覬覦也。因泛舟苕霅間、遂卜居武康上強山下。有樵童葉叟、雖常草木之葉、詣門而售者、亦答以善餌。一旦、樵夫鬻樵、有朮一把、商亦厚餌致之。其庭廡之下、籬落之間、草木諸葉、已堆積矣。忽閑步杖策、逍遙田畝蹊隧之傍、聊自怡適。問藜林間、有人相与言曰、中山劉商、今日已賜真朮矣。蓋陰功篤好之所感乎。窺林中、杳無人跡。奔歸取朮、修而服之。月余、齒髮益盛、貌如嬰童、举步輕速、可及馳馬、登涉雲巖、無復困憊。又月余、坐知四方之事、驗若符契、乃入上疆洞中、咸通初。有酒家以樵叟稍異、盡礼接之。累月復一至、因謂酒家曰、我中山劉商也。夙攻水壘、願留一箇、以酬見待之厚。使備繪素、而約以再來。一日果至酒家。援毫運思、頃刻而千山万水、非世工之所及。將去、謂酒家曰、我祖淮南王、令為九海總司、居列真之任、授我以南溟都水之秩、

旬日遠別、不復來矣。如是十許日、天色晴霽、香風瑞雲、弥布山谷、樵者見空中騎乘、飛拳南去出仙仗拾遺。

(中華書局排印本、ただし、一部他本を参照し改める)

『唐詩紀事』卷三二、劉商條

商、彭城人、居長安。劉禹錫作高陵令劉仁師遺愛碑云、武德名臣刑部尚書德威三代孫、大曆中詩人商之猶子。其名重如此。商終於檢校禮部郎中、汴州觀察判官。  
(中華書局排印本)

『咸淳毘陵志』卷二五、僊積、劉商條

劉商、彭城人。第進士、歷尚書郎。性冲澹、以病免、東遊茅山、至義興張公洞、畫溪、極愛賞、遂隱湖汭渚。後樵者見之、曰我劉郎中也。莫知所終。

(中国方志叢書所収・用清嘉慶二十五年刊本影印本、以下引用同本)

『唐才子傳』卷四、劉商條

商、字子夏。徐州彭城人。擢進士第。貞元中、累官比部員外郎、改虞部員外郎、數年、遷檢校兵部郎中、後出為汴州觀察判官、辭疾挂印、歸旧業。商性好酒、苦家貧。嘗對花臨月、悠然独酌、亢音長謠、放適自逐。賦詩曰、春草秋風老此身、一瓢長醉任家貧、醒來還愛浮萍草、漂寄官河不屬人。樂府歌詩、高雅殊絕、擬蔡琰胡笳曲、鱗炙當時。仍工画山水樹石、初師吳郡張璪、後自造真。張貶衡州司馬、有惆悵之詩。好神仙、鍊金骨。後隱義興胡父渚、結侶幽人。世傳冲虛而去。可謂江海冥滅、山林長往者。有集十卷、今佚。武元衡序之云。  
(粵雅堂叢書本)

『函繪寶鑑』卷二、劉商條

劉商、為郎中。性格高邁。愛画松石人物、初師張藻、後自造真為意。有觀奕圖石刻行於世。  
(画史叢書本)

(12) 劉商の伝記については、次の先行研究がある。

郭殿崇「唐徐州詩人劉商考」(『徐州師範學院學報(哲学社会科学版)』(一九八九年第三期))

儲仲君主考、陶敏、陳尚君補考「劉商」(傅璇琮主編「唐才子傳校箋」第二冊、第五冊補正、中華書局、一九八九、一九九五年)。

前者は、家世、仕履、交遊、著述、絵画の五点から考察を加え、特に交友關係が人物ごとに整理されている点に有益であった。また、後者は「唐才子傳」の注校として編まれたものであり、多数の資料を交え精密な考証

を行っており、示唆を受ける点が多かった。

(13) 為輔の官については、『新唐書』宰相世系表および「元和姓纂」にも記載がない。ただ、岑仲勉「元和姓纂四校記」(上海商務印書館、一九四八年)、四七〇頁によると、為輔の娘(七四二〜七八一、劉商の妹と見られる)と、その夫である陽濟(七一四〜七八五)の墓誌が知られており、前者では為輔を「岐州司馬」、後者では「扶風郡司馬」とするという。陽濟誌は、河南省文物研究所等編「千唐誌齋藏誌」(文物出版社、一九八三年) 函版九六三に掲載されている。

なお、劉禹錫に商の猶子(甥)の劉仁師について記した「高陵令劉君遺愛碑」(『劉夢得文集』卷二八)がある。

(14) 儲氏、陶氏、前掲「劉商」。儲氏は、序の制作時期を武元衡が初めて同平章事を授かった元和二年とした(第二冊、二六四〜二六五頁)。しかし、陶氏は武元衡序のいう「統臨井絡之人」の「井絡」は蜀地方を指す語であることから、彼が劍南西川節度使であった、元和二年〜八年の間とすべきであるとする(第五冊、二〇九〜二一〇頁)。

(15) 大曆詩については、次の論考を参照。

小川昭一「大曆の詩人―盛唐から中唐へ―」(『斯文』二四号、一九五九年)。

塩見邦彦「大曆十才子と謝朓」(『文化紀要』一三号、弘前大学教養部、一九七九年)。

蔣寅「大曆詩風」(上海古籍出版社、一九九二年)。

蔣寅「大曆詩人研究」上・下(中華書局、一九九五年)。

許総「從文人心態看大曆詩風的基本內涵」(『晋陽學刊』、一九九五年一)。

村上哲見「唐詩」(講談社・講談社學術文庫一三五二、一九九八年) 七九〜一九四頁。

(16) 「胡笳十八拍」については、次の論考を参照。

「胡笳十八拍討論集」(中華書局、一九五九年)。

小島祐馬「敦煌出現の胡笳十八拍」(『中国文學報』第一三冊、京都大學文學部中国語学中国文學研究室、一九六〇年)。

入矢義高「胡笳十八拍」論争(『中国文學報』第一三冊、京都大學文學部中国語学中国文學研究室、一九六〇年)。

芝田稔「胡笳十八拍」ノート(『関西大學文學論集』第一〇卷第九



号、関西大学文学会、一九六一年。

岡村貞雄「蔡琰の作品の真偽」(『日本中国学会報』第三集、一九七一年)。

ITAKURA Masaki, "Representations of Politicalness and Regionality in *Wen-chi's Return to China*," *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture*, vol.84, Tokyo: the Tōhō Gakkai, 2003.

(17) 唐代において、公主を異民族に嫁がせる、所謂和蕃公主については、次の専論を参照。

日野開三郎「唐代の和蕃公主」(同氏『東洋史学論集 第九卷北東アジア国際交流史の研究(上)』三一書房、一九八四年)。

(18) 小川氏、前掲「大暦の詩人—盛唐から中唐へ—」は、宝応元年(七六一)、朝廷が史朝儀から洛陽を回復した際、先に入城した回紇が略奪を行ったことを挙げ、その際に掠奪にあった婦人の辛苦を詠った詩として戎豈「苦哉行五首」を紹介し、類似の題材をとる例として劉商「胡笳十八拍」にも言及している。二九一—三〇頁。

(19) 清・徐松『登科記考』(一八三八年序)も卷二七、附考、進士科に名前を挙げるにとどまっている。

(20) 「送李元規昆季赴學」(『文苑英華』卷二七八)  
見誦甘泉賦、心期折桂歸。鳳雛皆五色、鴻漸又双飛。別思看衰柳、秋風動客衣。明朝問礼処、暫覺鴈行稀。

郭氏、前掲「唐徐州詩人劉商考」は、李元規を司農卿李錡の子とする。三一頁。昆季とは兄弟のこと。

(21) 崔門の淮南節度使就任は、『旧唐書』卷一〇、肅宗本紀によると上元二年(七六一)のことで、本碑文に彼が「六歳在鎮」したとあるので、碑文が大暦元年の作と分かる。

儲氏、前掲「劉商」第二冊、二五八—二五九頁。  
(22) 「合肥至日愁中寄鄭明府」(『歲時雜詠』卷三九)

失計為卑吏、三年滯楚鄉。不能隨世俗、忝是味行藏。白壁空無玷、黄沙只自傷。暮天鄉思亂、曉鏡鬢毛蒼。灰管移新律、窮陰變一陽。歲時人共損、幽憤日先長。拙宦慚知己、無謀誨自強。迺遭羞薄命、恩惠費余光。衆口誠難稱、長川却易防。魚竿今尚在、行此棹滄浪。

(23) 儲氏、前掲「劉商」第二冊、二五九頁。

(四庫全書本)

(24) 「送劉賓北歸」(『万首唐人絕句』卷四二)

南菓登望隰城孤、半是青山半是湖。知爾素多山水興、此回歸去更來無。  
(文学古籍刊行社用嘉靖刊本影印本、以下引用同本)

(25) 儲氏、前掲「劉商」第二冊、二五九—二六〇頁。  
儲氏は、唐代に郎官となった人物について記す、清・勞格、趙鉞『唐尚書省郎官石柱題名考』に劉商の名がないことも、彼の檢校職が名目だけで、早くから何部の郎中であつたか分からなくなつていたことの傍証とする。

なお、幕府への辟召と寄祿官については次の論考を参照。  
礪波護「唐の官制と官職」(小川環樹編『唐代の詩人—その伝記』大修館書店、一九七五年)。

(26) 吳廷燮『唐方鎮年表』卷二、宣武の部分によって確認できる(筆者の用いたのは中華書局、一九八〇年再版本)。  
また、節度使、觀察使、藩鎮については、次の二書を参照した。  
王寿南「唐代藩鎮与中央關係之研究」(大化書局、一九六九年(一九七八年修訂))。

日野開三郎『東洋史学論集 第一卷 唐代藩鎮の支配体制』(三一書房、一九八〇年)。  
(27) 以下に述べる李勉幕府のたどつた経過については、『旧唐書』卷一一、代宗本紀、卷一二、德宗本紀上、卷一二四、李正己伝、李納伝、卷一三一、李勉伝、卷一四一、田悦伝、卷一四二、李宝臣伝、李惟岳伝、王武俊伝、卷一四三、朱滔伝、卷一四五、李希烈伝、卷二〇〇下、朱泚伝、『新唐書』卷六、代宗本紀、卷七、德宗本紀、卷一三一、李勉伝、卷二一〇、田悦伝、卷二一一、李宝臣伝、李惟岳伝、王武俊伝、卷二一二、朱滔伝、卷二一三、李正己伝、李納伝、卷二二五中、李希烈伝、朱泚伝、『資治通鑑』卷二二四—二二九によつた。

(28) 「歷代名画記」の著者・張彦遠の曾祖・張延賞が李勉と親友で、書画、音楽など芸術的な交わりも深かつたことは、同書、卷一の「画の興廢を叙ぶ」に詳しい。

長廣氏、前掲「歷代名画記 一」、四二—四七頁。  
(29) 同時期の詩人で画家の劉方平も、李勉に重用されたという。『歷代名画記』卷一〇、劉方平条。

(30) なお、李勉が汴州の觀察使にも任じられていたことは、『旧唐書』卷一  
二、徳宗本紀の建中二年（七八一）正月の条によって確認できる。

(31) この時期、李勉はたまたま汴州城の拡張工事を行っていたため、朝廷が  
軍を進めるとの流言を生み、恐れた平盧の李正己が、軍を汴州との境界に  
ある曹州に駐留させるという事態も起こっている。『旧唐書』卷一二、徳  
宗本紀、『資治通鑑』卷二二六。

(32) 『三体詩』については、今回、基本とすべきテキストに当たることがで  
きなかったため、ひとまず村上哲見『三体詩』上・下（『新訂 中国古典  
選 一六、一七卷』朝日新聞社、一九六六、一九六七年）に依った。

(33) 陶敏氏、前掲「劉商」第五冊、二〇八頁。

(34) 書き下しおよび解釈は、村上氏、前掲「三体詩」下、三四二―三四四頁  
を参考にした。

(35) 寶常の揚州滞在の時期は、その兄弟五人の文集である『寶氏聯珠集』に  
付された、唐・褚藏言による「寶常伝」によって知ることができる。大曆  
一四年の進士及第一〇年後に揚州に移り、貞元一四年に淮南節度使の杜  
佑に招かれるまで滞在した。

儲氏、前掲「劉商」第二冊、二六一頁。及び同書所収の儲氏、「寶常」、  
二二一―二二三頁。

(36) 注(15)前掲書のうち、蔣氏『大曆詩風』と村上氏『唐詩』を特に参照し  
た。

(37) 「懷張璪」については第三章、「送王永」については第四章で取り上げ  
る。

(38) 「題水洞二首」については、第四章で後述する。

(39) 劉商の樹石画制作について触れるものに次の論考がある。

古田氏、前掲「中唐に於ける樹石図の展開について」、五六頁。

(40) 唐代の題画詩を集めて注釈を施したものに、次の文献がある。劉商詩に  
ついても収めており参考となった。

孔寿山『唐朝題画詩注』（四川美術出版社、一九八八年）。

(41) 袁德師については、その常州軍事判官在任時のことを記した李観「常州  
軍事判官序壁記」（『文苑英華』卷八〇三）があり、これによって宜興の  
尉から同職へ移ったことが分かる。

儲氏、前掲「劉商」第二冊、二六一頁。

(42) ただ、「酬濬上人采藥見寄」（万一五、全三〇四）、「送濬上人」（万四

二、全三〇四）と同一人物の可能性がある。

(43) 「哭韓淮端公兼上崔中丞」（『文苑英華』卷三〇三）

堅貞与和璧、利用婦干将。金玉徒自宝、高賢無比方。挺生巖松姿、孤  
直陵雪霜。亭亭結清陰、不競桃李芳。讀書晒羈業、翊賛思皇王。千載  
有疑議、一言能否藏。儒風久淪弊、顏閔寿不長。邦国豈殄瘁、斯人今  
又亡。別離長春草、存没隔楚鄉。聞問尚書勸、淚凝向日黃。奄忽薨路  
唏、杳冥泉夜長。賢愚自修短、天色空蒼蒼。銘旌斂婦魂、荆棘生路  
傍。門柳日蕭索、總帷掩空堂。灯孤晦処明、高節歿後彰。芳蘭已灰  
燼、幕府留余香。常愛独坐尊、繡衣如厲行。至今虚佐位、言発涙沾  
裳。

(44) 張璪については、古田氏、前掲「中唐に於ける樹石図の展開について」  
が詳しい。五二―五六頁。

(45) この詩は、『歴代名画記』劉商条の他、『唐詩紀事』劉商条などにも引  
かれている。

(46) 陶敏氏、前掲「劉商」第五冊、二〇八―二〇九頁。

符載の江陵滞任時期は、彼自身が貞元七年に記した「荊州与楊衡説旧因  
送遊南越序」（『文苑英華』卷七二七）によって確認できる。

吳汝煜「楊衡」（前掲「唐才子伝校箋」第二冊）六〇〇―六〇一頁。

(47) 符載「江陵陸侍御宅讌集觀張員外画松石序」（『唐文粹』卷九七）

六虚有精純美粹之氣。其注人也、為太和、為聰明、為英才、為絕芸。  
自肇有生人、至于吾儕、不得則已、得之必騰凌夔絶、独立今古。用雖  
小大、其神一貫。尚書祠部郎張藻「璪」、字文通、丹青之下、抱不世  
絶儔之妙、則天地之秀、鍾聚于張之一端者耶。初公盛名赫然、居長安  
中。好事者卿相大臣、既迫精誠、乃持權衡尺度之跡、輪在貴室、他人  
不得誣妄而觀者也。居無何、謫官為武陵郡司馬。官閑無事、從容大  
府、士君子由是往往獲其宝焉。荊州從事、監察御史陸澧、字深源、泊  
令弟曰瀾、曰潤、曰淮、皆以文行穎耀当世。故含藻蓋奇之士、多遊其  
門焉。秋七月、深源陳讌宇下、華軒沈沈、樽俎静嘉、庭篁霽景、疏爽  
可愛。公天縱之思、歛有所詣。暴請霜素、願搗奇蹤、主人奮裾嗚呼相  
和。是時座客声聞士、凡二十四人、在其左右、皆岑立注視而觀之。員  
外居中箕坐鼓氣、神機始發。其駭人也、若流電激空、驚飄戾天。摧挫  
幹掣、擲霍瞥列、毫飛墨噴、掉掌如裂、離合恟恍、忽生怪状。及其終  
也、則松鱗皴、石巖巖、水湛湛、雲窈眇。投筆而起、為之四顧、若雷

雨之澄霽、見万物之情性。觀夫張公之芸、非画也、真道也。当其有事、已知夫遺去機巧、意冥玄化、而物在靈府、不在耳目。故得於心、應於手。孤姿絕狀、觸毫而出、氣交沖漠、与神為徒。若付短長於隘度、筭妍蚩於陋目、凝觚舐墨、依違良久、乃繪物之贅疣也、寧置于齒牙間哉。於戲由基之弧矢、造父之車馬、内史之筆札、員外之松石、使其術可授、雖執鞭之賤、吾亦師之。如不可求、從吾所學、則知夫道精芸極、當得之於玄悟、不得之於糟粕。衆君子以為是事也、是會也、雖蘭亭金谷、不能尚此。或闕歌頌、取羞前人、命鄙夫首叙、諸公得揮其宏思耳。  
(四部叢刊本)

(48) 西脇常記『唐代の思想と文化』(創文社、二〇〇〇年)。

(49) 長廣敏雄訳注『歴代名画記 二』(平凡社・東洋文庫三一、一九七七年)解説、三二七―三三一頁。

(50) 中村茂夫氏は、朱景玄『唐朝名画録』の逸品画風について述べる中で、張璪の作画に逸品画風の画家と共通性が見られることを述べ、また、張志和らの逸品に分類される画家が道家思想と関わりの深いことに言及し、張璪についても符載の記述がその方向で批評していることを指摘されている。ただ、氏は、「衣冠文学は当時の名流なり」といわれる璪は、「中略」張志和のごとき徹底した脱俗隱栖の士とはかなり径庭があったと思われ、「璪自身が真に老荘の道を体得した人であったかどうかはよく判らない」と議論を保留している。

同氏『中国画論の展開 晋唐宋元篇』(中山文華堂、一九六五年)二六一―二六六頁。

(51) 西晋・何敬祖「遊仙詩」(『文選』卷二二)

青青陵上松、亭亭高山柏。光色冬夏茂、根柢無彫落。吉士懷貞心、悟物思遠託。揚志玄雲際、流目矚巖石。羨昔王子喬、友道發伊洛。迢遞陵峻岳、連翩御飛鶴。抗跡遺万里、豈恋生民樂。長懷慕仙類、眇然心縣邈。  
(四部叢刊本)

本詩については、宗像氏、前掲「中国における樹石図の発生とその意義」が、すでに言及されており、示唆を受けた。一六三―一六四頁。

(52) 宋・梁・江淹(字・文通)「從冠軍建平王登廬山香鑪峯」(『文選』卷二二)も、廬山香炉峰を、鸞や鶴が棲み仙靈の通うところとし、この山のような松柏の間に隱遁したい(「方学松柏隱」と述べる)。

(53) これらについての、張璪、劉商以外の画家の場合など全体的な俯瞰は、

別に稿を改めて論じたい。また、道教同様、この時代の思想に深い影響を及ぼしている仏教との関係についても、その際に考察することとしたい。

(54) 「題楊侍郎新亭」(英三一六、全三〇三)は、「毘陵過柱史」とあり晩年に宜興へ隱棲する際に毘陵を訪れたときのものと思われる。「野客隣霜壁、青松画一枝」とあり、新たに築かれた亭の壁に松を描くことを快く引き受けているようである。前掲の『咸淳毘陵志』は、彼の人為を「冲澹」と評しているが、それもなるほどと思える。

(55) これら二つの劉商伝はともに『太平広記』(九七八年)に引用されているが、これは後述のように内容の差異から、『太平広記』の編者が別人の可能性を考慮して双方を収録したためと思われる。

『太平広記』の神仙類の配列については、山田利明「太平広記神仙類巻第配列の一考察」(『東方宗教』四三号、一九七四年)があり、完全ではないものの編年体の体裁をとることが指摘されている。

氏の意見に従えば、劉商の伝のうち、『仙伝拾遺』の収録される第六巻は漢代に、『統仙伝』の収録される第四六巻は唐代に当たっている(同氏、四一頁)。「仙伝拾遺」が巻六に配されたのは、同書が劉商を前漢の中山靖王・劉勝の後裔としているためと考えられるが、これが本稿で扱う劉商の伝であることは説話の内容から明らかである。

なお、氏の制作した配列表(四〇頁)では、巻四六の劉商の出典を「神仙感遇」と記しているが、これは本来直前に配されている王子芝との順序を入れ違えたために生じた誤記であるので注記しておく。

(56) 註(1)前掲『統仙伝』。

(57) 仙人が市に現れるという例は数多い。例えば、東晋・葛洪「神仙伝」巻五、壺公では、仙人の壺公が市で薬を売っており、市の役人であった費長房が、その凡人でないことを知って教えを受け、また樓に上って会飲している。

なお、仙人と市の関係を論じたものに、次の論文があり参考となった。

相田洋「異人と市―『列仙伝』の世界」(『福岡教育大学紀要』四二号第二分冊、一九九三年、同氏「異人と市 境界の中国古代史」研文出版、一九九七年に「市と異人」として再録)。

(58) 『咸淳毘陵志』における張公洞、罨画溪(東瀉溪)、胡父渚(湖沃渚)の記述を引いておく。

卷一五、洞、宜興

張公洞、在県東南五十五里。高六十仞、麓周五里。三面皆飛崖絕壁、不可躋攀、惟北向一竇、宏踰四尋、嵌空可入〔中略〕、行約三里、南望小洞、通徹於外、徑此而出〔中略〕。風土記云、漢天師道陵得道之地〔中略〕、俗伝以為張果、果唐武后時人〔後略〕。

卷一五、溪、宜興

東瀉溪、在県東南三十六里。陸希声頤山録謂、山前百余步、衆流合而東、故名〔中略〕、兩峰多藤花、春時照影、水中青紅、可愛、亦名罨画溪〔後略〕。

卷一五、渚、宜興

湖狀渚、在県南四十里、因水洄狀故名。

〔湖狀渚〕が『統仙伝』のいう「胡父渚」であることは、前掲の『咸淳毘陵志』劉商条が基本的に『統仙伝』の内容に基づきつつ、隱棲の場所を「湖狀渚」と表記していることから分かる。

(59) 註(11)前掲「仙伝拾遺」。

(60) このような記述がなされた背景を考える上では、敦煌出土の『胡笳十八拍』（ペリオ目録二五五五号）に、彼の官を「承義郎前盧州合肥県令」としているのが注意される。

小島氏、前掲「敦煌出現の胡笳十八拍」、七〇頁。

(61) 上強山については、白居易に「寄題上強山精舍寺」（清・汪立名編『白香山詩集』補遺、卷上）という詩がある。汪立名の注によれば、南宋の王象之『輿地紀勝』から引いたもので、湖州帰安県の上強山精舍寺についての詩ということであるが、今回は調査が及ばなかつたので注記するに止める。

(62) 罨画溪という地名は長興県（浙江省）にもあり、武康に比較的近いことから、劉商の武康隱棲説に何らかの影響を与えたことも考えられる。

清・趙定邦等修、丁宝書等纂『長興県志』（一八七四年）卷一一、水

罨画溪、在県西八張志作七里、花時游人競集、溪半有罨画亭、唐鄭谷

詩云、顧渚山辺郡、溪將罨画通輿地紀勝〔後略〕。

（中国方志叢書所収・用清光緒一八年増補刊本影印本）

(63) 両説話に注目される類似点として、入山後の劉商が、出会った相手に対して、『統仙伝』では「我劉郎中也」、『仙伝拾遺』では「我中山劉商也」と、相似通った名乗り方をしていることが挙げられる。これは、前者の説話的印象的な部分として、後者にも影響を与えている可能性があるであろう。

(64) 唐代の道教史については、次の文献を主に参照した。

砂山稔『隋唐道教思想史研究』（平河出版社、一九九〇年）。

(65) 従って劉商に対する道士という呼称は、正確には道教信者とすべきであるが、老年に茅山を訪れ、さらには神仙にあこがれて山中へ隱棲した道教への傾倒ぶりを考えれば、単なる在家の信者とは一線を画するものがあるため、敢えて道士の語を用いることとした。

(66) 洞天福地説については、次の論考を参照。

三浦國雄『洞天福地小論』（『東方宗教』六一号、一九八三年）。

田中文雄『洞天福地の思想』（『シリーズ道教の世界 一 仙境往来―神界と聖地―』春秋社、二〇〇二年）。

(67) 司馬承禎『天地宮府図』、七十二「福地

第五十九張公洞、在常州宜興県、真人康桑治之。（明正統道藏本）

(68) 「題潘師房」（『万首唐人絶句』卷四二）

渡水傍山尋絶壁、白雲飛処洞門開。仙人来往行無跡、石径春風長緑苔。

なお本詩は、『文苑英華』卷一六一には、同時代の于鵠の詩「題合溪乾洞」として収録されているが、内容的には劉商のものとすると方が妥当と考える。

(69) 「袁十五遠訪山門」（『万首唐人絶句』卷四二）

僻居謀道不謀身、避病桃源不避秦。遠入青山何所見、寒花滿径白頭人。

(70) 「題水洞二首」（『万首唐人絶句』卷四二）

桃花流出武陵洞、夢想仙家雲樹春。今看水入洞中去、却是桃花源裏人。長看巖穴泉流出、忽聽懸泉入洞声。莫摘山花抛水上、花浮出洞世人驚。

(71) 砂山稔「瞿童登仙考―中晚唐の士大夫と茅山派道教―」（『東方宗教』六九号、一九八七年、同氏、前掲『隋唐道教思想史研究』に再録）。

(72) 黄洞元が茅山へ移った時期は、温造『瞿童述』に、「〔黄洞元〕貞元五年十一月、復遷居潤州茅山」とあることから確認できる。

これについて砂山氏は、茅山派第十四代の宗師・韋景昭が仙化してから約四年後であり、「盛名のあつた黄洞元が、韋景昭なき後、茅山派の宗師の地位に即くべく茅山の地に招かれたと考えるのが至当であろう」とされる。

砂山氏、前掲「瞿童登仙考―中晚唐の士大夫と茅山派道教―」、一三〇―一四頁。

(73) 「謝自然却還旧居」（『万首唐人絶句』卷四二）

(74) 仙侶招邀自有期、九天升降五雲隨。不知辭罷虛皇日、更向人間住幾時。謝自然については、次の論文を参照。

遊佐昇「謝自然と道教—唐代道教の一考察—」（『牧尾良海博士頌壽記念論集 中国の宗教・思想と科学』国書刊行会、一九八四年）。

深澤一幸「仙女謝自然の誕生」（『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院、二〇〇〇年）。

(75) 遊佐氏、前掲「謝自然と道教—唐代道教の一考察—」、五四〇頁。深澤氏、前掲「仙女謝自然の誕生」、四二一—四二四、四二四—四二八頁。

(76) 深澤氏、前掲「仙女謝自然の誕生」、四二一—四二二、四二五—四二六頁。

(77) 「酬濟上人采葉見寄」（『万首唐人絶句』卷一五）  
王英期共采、雲嶺独先過。応得靈芝也、詩情一倍多。

「寄李備」（『万首唐人絶句』卷四二）  
挂却衣冠披薛荔、世人应是笑狂愚。年来漸覺鬢鬚黑、欲寄松花君用無。

(78) ただし、五十前後の時期の劉商の持病は、年齢を考えると仙薬の服用による薬害であった可能性も考慮される。唐代の仙薬による薬害については次の文献を参照。

川原秀城「毒薬は口に苦し—中国の文人と不老不死—」（大修館書店・あじあブックス三一、二〇〇一年）。

(79) 「送王水二首」（『万首唐人絶句』卷四二）  
君去春山誰共遊、鳥啼花落水空流。如今送別臨溪水、他日相思來水頭。

綿衣似熱袂衣寒、時景雖和春已闌。誠知暫別那惆悵、明日藤花独自看。

(80) 前掲『咸淳毘陵志』では、罨画溪の名の由来を、藤の花が多く、その花の水面に映る美しさから名づけられたとしている。

(81) 「合谿水漲寄敬山人」（『万首唐人絶句』卷四二）  
共愛碧谿臨水住、相思來往踐莓苔。而今却欲嫌谿水、雨漲春流隔往來。

(82) 「不羨花」（『万首唐人絶句』卷四二）  
惆悵朝陽午又斜、刺裁桃李學仙家。花開花落人如旧、誰道容顏不及花。

(83) 「山中寄元二侍御二首」（『万首唐人絶句』卷四二）  
心期汗漫臥雲扃、家計漂零水上萍。桃李向秋彫落尽、一枝松色独青青。  
拖紫鑄金濟世才、知君倚玉望三台。深山窮谷無人到、唯有狂愚独自來。

(84) 司馬承禎と吳筠および彼らの思想については、次の論文を参照。

神塚淑子「司馬承禎『坐忘論』について—唐代道教における修養論—」（『東洋文化』六二号、東京大学東洋文化研究所、一九八二年）。

今枝二郎「司馬承禎について」（『秋月観映編』『道教と宗教文化』平河出版社、一九八七年）。

(85) 神塚淑子「吳筠の生涯と思想」（『東方宗教』五四号、一九七九年）。元・周密「雲煙過眼録」卷上、名画の唐代画家の作品が並ぶ部分に「劉商十八拍」として著録される。

(86) 劉商「觀奕図」に関する文献は、陳高華『隋唐画家史料』（文物出版社、一九八七年）に、九例が挙げられている。三五—三五四頁。ここでは、参考までに二例を挙げる。いずれも画中の人物を隠者や神仙と関係付けている点に注意される。

元・唐元「跋李伯時『公麟』摹劉商觀奕図」（『筠軒集』卷一一）  
有如是松石拳確、物外境界也。有如是衣冠对奕、物外散人也。披褐翁惟知拆薪、初与何事、今袖手旁觀、似依依不忍去者、其未能忘機耶。

機心一露、与伯時臨摹、茅生勦、鉄坡翁所題皆贅、又使余不已於言、得無重贅。孰若今劉商者、持斧入林、作丁丁太古音、泯然於心迹之表。使大蘇公可作、必賞余言、為之噴飯滿案。（四庫全書本）  
元・張翥「劉商觀碁図」（元・顧瑛輯『草堂雅集』卷四）  
鶴髮羅衣四老仙、空山流水境蕭然。松根柯爛人忘世、石上棋歸洞有天。刻本只今迫粉墨、遺蹤何處没雲烟。信知甲子須臾事、又數龍眠二百年。（四庫全書本）

### 付記

本稿は、平成一六年度に鹿島美術財団より「美術に関する調査研究の助成」を受けた課題「唐代山水画の主題に関する研究—神仙山水と樹石画を中心に—」と平行して、画家研究として進めたものであり、内容の一部にその成果を使用させていただいた。また、京都大学人文科学研究所における「中国絵画の総合的研究」研究班の研究会において、概要を発表する機会を与えていただいた。助成を賜り、本誌への掲載についても御理解をいただいた鹿島美術財団、発表の際、多くの貴重な助言を賜った京都大学會布川寛氏、宇佐美文理氏、大原嘉豊氏および班員諸氏に、深く感謝の意を表す。